

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.3

みんなのキモチ



まえがき

「なんで龍大が？ 仏教と LGBT って関係あるん？」

2019年4月、龍谷大学の学生と教職員が協力し、性の多様性を認め合うアジア最大級のイベント「東京レインボープライド」に、はじめて出展したときのこと。関西の大学からの出展はめずらしく、しかも龍大ブースの目玉イベントが「レインボー念珠づくり体験」というユニークな企画だったことから、驚きと珍しさも手伝って、本当にたくさんの方々が立ち寄っていただきました。

興味津々で来訪して下さった方々と会話をするうち、お互い共通の友人がいることがわかったり、海外の方が興味を持って下さったりと、つながりの輪がどんどん広がっていき、そこで新しいアイデアが生まれ、さらにネットワークが広がって……。そんな様を目の当たりにし、人のつながりこそがパワーの源だと確信しました。

そんなことから、新たなつながりを目指して『大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.3 みんなのキモチ』を企画し、学生や学生に近い有縁の方々に執筆をお願いしたところ、多忙にもかかわらず、こころよく引き受けていただきました。また、執筆はかなわなかったものの、現役学生を含む多くの人が企画に賛同していただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

1巻、2巻とあわせてお読みいただき、執筆者一人ひとりのリアルなキモチと自分らしさのカタチを、読者のみなさまのそれぞれのライフストーリーの1ページに添えていただくことができましたら幸いです。

2019年10月

龍谷大学 宗教部

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.3

みんなのキモチ

目次

「女に戻る」その意味とは・・・。	(中川 未悠)	・・・	4
ありのままのあなたが輝ける未来を	(東根 歩夢)	・・・	14
恋愛はしなくてもいい、してもいい	(青山)	・・・	22
私が望む社会	(堀 由栗加)	・・・	30
自分の気持ちを受け入れる	(にし)	・・・	38
自然に生きる	(ぜん)	・・・	46
シアトルで感じたダイバーシティ	(鋤田 早紀)	・・・	70

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.3

みんなのキモチ

「女に戻る」その意味とは…。

中川 未悠

【自己紹介】

1995年、兵庫県神戸市に長男として生まれる。幼稚園の頃から絵を描くことや工作が好きで、高校は兵庫県立兵庫工業高等学校、デザイン科卒。その後、ファッションに強い関心を持ち、大学は神戸芸術工科大学、ファッションデザイン学科に入学。幼い頃から性別に違和を感じており、2017年春に21歳で性別適合手術を受けた。その手術を受けるまでを記録したドキュメンタリー映画「女になる」の主人公を務めた。2017年から今も全国各地で上映会や講演会を行いながら、アパレル会社に勤めている。

【オカマという言葉】

幼少期から周りには女の子の友達がたくさん。内気な性格ではなく、「美少女戦士セーラームーン」や「おジャ魔女どれみ」が大好きで、よく真似をし、外を走り回っていた。幼稚園はあまり男女分けられることもなく、みんなと仲良く過ごす毎日だった。しかし小学校入学時、両親に買ってもらったランドセルが嫌だった。

「やっぱり黒色のランドセルなんや。友達と一緒に赤色がいいな」小学校に入っても変わらず、筆箱や、鉛筆など身の回りのものは可愛いキャラクターばかり。すると同じクラスの男子生徒がこう言った。

「お前、男のくせに可愛いものばかり持って気持ち悪い。オカマみた

い」

すごくショックだった。自分がいいと思うものを持っているだけなのに…。そこから男子生徒から「オカマ」と呼ばれるようになった。

【からかう言葉を笑いに変えた】

オカマやオネエと呼ばれる人たちをテレビで見たことはある。でも自分自身が彼女らと同じだとは思わなかった。いじめの対象にはなりたくなかったので「オカマ」と呼ばれるたびに「オカマやで！近寄ってきたら襲うからな」など、関西人らしい返し方で、あえて笑いに変えた。学校では、からかう言葉を笑いに変えていたが、家に帰ると悔しい気持ちや、悲しい気持ちで押しつぶされそうになった。

「自分はオカマじゃない」じゃあ一体自分は何者なのだろうか…。中学生になると答えは見えてきた。

【性同一性障害って病気なの？】

中学生の頃、今までバラエティ番組で見るオネエタレントの皆さんとは違い、女優やモデルといった方々、はるな愛さん、椿姫彩菜さん、佐藤かよさんがテレビによく出てこられるようになった。彼女たちのドキュメンタリーなどを拝見し、同じ悩みを抱えていることを知り、「もしかしたら私もそうなのかもしれない」と思った。気持ちがすごく楽になった。自分が何者なのか、ようやくわかった気がしたから。だが「障害」という言葉に引っかかる。自分は病気じゃないのになぜ。また新たな悩みが当時の私の気持ちに突き刺さった。

【友人の支え】

性同一性障害という自覚をしてからも、友達にカミングアウトはしなかった。幼少期から中学生まで一緒に友人が多かった。セーラームーンごっこやおままごとをして遊んでいたこと、男の子を異性として見ていることも知っていた。男とか女とか関係なく、なか（愛称）はなかというふうに思っていてくれていたと信じていた。だからあえて友人には打ち明けず、今まで通りに遊んでいた。

そんな中、恋の悩みを相談する友人もいた。中学生になり好きな人ができた。勉強ができて、運動ができて、優しい人だ。私は勇気を振り絞り、その人に告白をした。すると…。「お前、男だろ。ホモかよ」と言われた。また現実を突きつけられる。

「男性器が付いているからだ」「男として生まれたからだ」

自分の体を痛めつけることもあった。いつか女性になるために、一体自分には何ができるだろう。

そんな相談を聞いていた友人が、メイクをすることを勧めてくれた。憧れだったメイク。こそこそとメイクをし、ウィッグを被り、親には内緒で友人と外を歩いたりしていた。人の目は気になるが、楽しかった。テンションが上がった。ほんの少しだけ将来の自分が見えた気がした。

その一方、まだまだ男子生徒のからかいはあった。小学生の時から言われ続けている「オカマ」という言葉。笑いに変えるのも当たり前のようにになっていた。クラスメイトや先生たちに自分自身を認めてもらいたいという気持ちがだんだん強くなっていった。思い切って学級代表に立候補し、前に出るように心がけた。そうすると自然と周りには、ひとりの人間として見てくれる友人や先生が増え、学校生活が楽しくなった。

それから中学、高校とずっと学級代表を務めた。

【男性化していく体】

辛い思いをしながらも、前に進めた理由。それは、母から言われ続けてきた言葉があったから。

「人生は一度きりだから、後悔しない生き方をしなさい」

学校に行きたくない時期もあったが「勉強しなさい、学校に行きなさい」は言われたことがなかった。有難いことに、習い事など私がやりたいことは何不自由なくさせてもらった。そんな母が離婚して家を出ていったのは中学生の頃。母親に側にいて欲しい思春期のことだった。母が家を出て行ってからは、父と祖母の生活が始まった。そんな中で、身長が伸びたり、筋肉質な体つきになったり、自分の体がどんどん男性化していくことに恐怖を覚えた。

高校生の頃は SNS やインターネットも盛んで、性同一性障害について調べ、性別適合手術を含む治療のことも知っていた。

通っていた高校の先生に相談し、当事者の方を紹介してもらい、治療について話を聞いた。治療ができるクリニックを教えてもらった。

【女の子として生きていきたい】

一刻も早く男性化を止めたい…。まずは離れて暮らす母へカミングアウトしようと心に決めた。いざ母を目の前にすると、言葉が出てこない。出てくるのは涙ばかり。

「受け入れてくれなかったらどうしよう」「親子の縁が切れたらどうしよう」色んな不安がよぎり、なかなか言い出せなかった。

そんな私の様子を見た母からすると、「もしかしたら、この子は人を殺したのかもしれない」そう思われるくらいの緊張した空気感だった。

「女の子として生きていきたい」ようやく言えた。

すると母は「薄々は気づいていたよ…。じゃあ孫の顔は見られないよね…」

その言葉に申し訳ない気持ちが込み上げてきた。母は治療をしていくにあたって、体のことを心配してくれた。「一緒に病院に行こう」と。

【自分が母を苦しめている】

母に気持ちを伝えたことで、ホッとした自分もいたが、母の言葉が本音だと思うと胸が苦しかった。母にカミングアウトをした翌日の朝、父に叩き起こされた。

「お母さんが手首を切って…。救急車で運ばれている」と…。

父は病院に行き、私は学校に行かされ、ずっと学校で泣いていた。自分のせいで、母を苦しめている。自分を責めた。

「私なんて生まれてこなければよかった」

今思うと、きっと母も同じ気持ちだったのだろう。「我が子をこんな風に生んでしまった」と。その後母も落ち着き、一緒に精神科のカウンセリングを受けにいった。

「お母さんのせいでも、お子さんのせいでもないですよ」医者言葉に母と私は少し救われた。

【俺にはわからない】

治療を始めるには、私は未成年だったので、親の承諾が必要だった。

親権は父だったため、カミングアウトをしなければならなかった。

父に言おうと決めた日にタイミングが悪く、女性の格好をしている写真を見られてしまった。

「お前、オカマか。説明しろ」私は母に話した内容を全て話した。

すると父は「俺にはわからない」ただその一言だった。それから父とはひと月以上、会話がなくなり、重苦しい空気で満たされた。

父と祖母と病院に行き、医者から説明を受けた。今後、どのような治療をしていくか、副作用のことなど事細かく聞いた。父はホルモン治療の同意書にサインをしてくれたのだ。帰りの車の中で父は「自分で全部解決しようとするなよ」と言ってくれた。涙が止まらなかった。普段、無口で気難しい父だが、初めて認めてもらえた気がした。祖母から聞いた話だが、カミングアウトをした後、父は泣いていたそう…。今までに父が泣いている姿は見たことがない。またもや私のせいで人を傷つけてしまった。複雑な気持ちは、しばらくの間消えなかった。

今でこそ、両親は私のことを理解してくれているけど、やっぱり男の子のままでいた方がよかったのかな、とふと思うことは未だある。

手術したことを後悔はしていないが、自分の幸せより両親の幸せを考えると、孫の顔を見せてあげることができない。それに、健康な体にメスを入れてしまった…。でも母は今「男の子も女の子も両方産めた」と言ってくれた。そんな風に捉えてくれるなんて。少し安心した。

【私にとってファッションとは】

19歳からホルモン治療を開始。普段から女性として生活していくと決めた。そしてある日、メイクをして女性の服装を着て家を出ようとした

とき、父が帰ってきた。

「そんな可愛い格好をしてどこ行くんや」

すごく嬉しかった。「可愛い格好」その言葉がまた、女性として生きるための一歩を後押ししてくれた。女性の服を着ている自分が、一番自分らしくいられる。ファッションは自己表現のひとつ。私は、ファッションの道に進もうと思い、大学ではファッション学科を専攻した。

【辛い過去をポジティブに】

男として生まれた記憶は、私の中から消すことはできない。一生残る事実ならいっそ映像として残して、私が大人になったとき、「こんな時もあったな」と笑って見られるようにしたい。そしてドキュメンタリー映画を撮ることを決意した。監督は、数多くのドキュメンタリー映画を手がける田中幸夫氏だ。

知人の紹介で何度か会話を重ねるうちに、自分から依頼した。最初は、監督からも、家族からも反対された。多くの人に見られる以上、賛成もあれば反対の意見をもつ人もいる。

「全員があなたかく守ってくれるような、世の中ではない」

確かにそう思った…。だけど、誰かがやらないと世の中は変わらない。責任感が強かった私の意志は固かった。撮影していく中で、私の強い覚悟を見定めてくれた監督。家族、友人、学校、医師たちの撮影協力のもと完成した作品が「女になる」だ。今までになかったような、ポジティブで明るいドキュメンタリー映画。

私は周りから受け入れてもらえるような、恵まれた環境で育った。でも、私なりに勇気をもって前へ出て、自分を表現してきた。

今、辛い思いをしている当事者の方も、勇気をもって、周りに打ち明けることができたなら、理解してくれる人がきっとひとりはいるはず。決して自分を責めないで。

「そんな気持ちが、映画を通じてたくさんの人に伝わればいいな」

【やっと本来の姿に】

大学3年生の春休み。私は名古屋にいた。性別適合手術を受けるためだ。バイトを掛け持ちして必死に集めた手術費用。ついにこの日が来るのか。「やっと本来の姿に戻れる」そう思った。本来であれば、女性として生まれてこないといけな存在。「たまたま男性器が付いてきただけ」、「神様のいたずら」そう思っている。

手術が無事に終わり、やっと女性に戻れた。痛みに耐えながら、うれし涙が溢れ出した。

21歳という若さで手術ができたこと。人生の中で、運命が変わる瞬間。私自身、想像もしていなかった。自分の性に悩み、苦しんでいた過去を受け入れながら、今日からまた新たな人生を進んでいこう。

【今の私の気持ち】

今、私は大学を卒業し、アパレル会社に勤めながら、全国各地で「女になる」の上映、講演会を行なっている。性同一性障害として生まれたことに対して後悔は一切ない、誰かを恨む気持ちもない。手術をしてまで自分の体を変えることはしんどかった。でもそれ以上に、たくさんの人に出会うことができた。この世に産んでくれた母や、支えてくれた家族や友人に、心の底から感謝している。手術するまで私の周りにはスト

レートの友人ばかりだったが、映画をきっかけに当事者の方々と出会う機会が増えた。

「性はグラデーション。みんな違ってみんないい」その通りだと思った。だからこそ、私が身近な存在として、トランスジェンダーのことを伝えていきたい。

未悠21歳、
3週間前まで
男だった

性同一性障害から性別適合手術へ
単純で複雑な胸の裡(思い)を軽やかに描くドキュメンタリー

爽やかLGBTsドキュメンタリー

女になる

「視察団鑑」「徘徊 マリン87歳の夏」「神様たちの街」
田中幸夫監督作品

企画・製作・配給・販売制作事務所 助監督・技術統括・北川 希 音楽・占田一弘 石川泰三 ヘアメイク・山崎美 撮影協力・永井謙次 宣伝写真・谷 我志 題字・デザイン・東 季 宣伝・瀬谷隆広 配給・オオパルムズ
監督 撮影 編集 製作 田中幸夫
2017年/日本/110(160)/74分
映画公式サイト onnaninaru.com



映画「女になる」のポスター。主演：中川未悠 監督：田中幸夫
公式 Web サイト <http://onnaninaru.com/>

ありのままのあなたが輝ける未来を

東根 歩夢

みなさんはLGBTと聞いて、どんなことを想像しますか？ 現在、約10人に1人がLGBT当事者だと言われています。AB型、左利きの人と同じくらいの割合です。そんな世の中で知らない、気持ち悪い、周りには居ない、そんなことは言っていられません。

是非、今当事者の声に耳を傾けてみて下さい。

【幼少期の私】

1992年、私は兵庫県神戸市で東根家の次女としてこの世に誕生しました。生まれた時に付いた名前は「あゆみ」。5歳上の姉まで、女性はみんな名前の最後に子が付いている家系でした。

幼い頃からを振り返ってみると、遊ぶ相手はいつもの男の子。外で遊ぶのが大好きな活発な子でした。野球をしたり、ゲームをしたり、釣りに行ったり…。姉が人形遊びやおままごとをして遊んでいても興味がなかったように思います。

その頃からいつも憧れていたのが、立っておしっこをすること。男の子はどこで遊んでいても、おしっこがしたくったら家に帰らず、草むらに隠れて出来る。どうして私にはそれが出来ないのだろう…。いつか出来るようになるのかな？ そう思いながら、両親には内緒でよく練習していました。

小学生の高学年になってくると、今まで毎日のように遊んでいた男の

子たちとも距離が出来るようになっていました。ちょうどその頃に女性の象徴でもある、月経が始まりました。初めての日は今でも鮮明に覚えています。母の友人と食事に出かけ、私は先に家に帰りました。いつものようにトイレに入り、ズボンをずらすとパンツは真っ赤っか。え、大丈夫？病気？と焦りました。

母に慌てて電話をすると「月経が始まったね！おめでとう！赤飯を炊こう」と言われました。性の授業は男女で分かれてしていたはずなのに、自分にも月経があるのだと思い知らされたショックな瞬間でありました。その後も月経の会話も避けたり、何それ？と誤魔化したりしていました。

恋愛はと言うと、この頃から気になる相手は女性。特に、ボーイッシュで活発な子。恋愛なのか自分に似たような子を探していたのかと言われると半々くらいかもしれません。

【思春期に起こった出来事】

中学生になり制服(スカート)での登校が始まりました。履きたくないと言うよりも、履かなくてはいけない。と割り切りの気持ちで、スカートの下には体操服を着て登校していました。

部活動は女子ソフトボール部。野球が好きだったけど、野球部は男子の部活。少しでも野球に似たスポーツがしたい。カッコいいスポーツがしたい。と思い入部しました。

そこで出逢った1つ上の先輩に初恋。今までと違う感情でした。私は、部活動にのめり込む活発な一面もある中、不安を抱え込むタイプで、ある日突然、胃痛に襲われ、病院に行きました…。診断結果は自律神経失調症。その日から精神安定剤と胃薬を飲むことになりました。

そのまま高校生になり、大好きなソフトボールを続けたいと思いながらも症状が重くなる一方で、自宅に帰りたい気持ちには勝てず、部活動には参加出来ませんでした。

そんな日々が約半年ほど続き、部活動の監督から「もう大丈夫とちがうか？」と、声をかけていただき、少しずつ練習に参加出来るようになっていきました。症状が軽くなったりはしなかったですが、部活動にも慣れ出してから、少し前向きに行動出来るようになってきました。

そんな光景を見ていた隣のクラスの男の子から告白を受け付き合ってみることに。でも、何かが違う。手を繋ぐのも気持ち悪い…、1、2ヶ月で別れました。その頃に抱いていた感情もやっぱり女の子が好き。

ある日、仲の良いグループで廊下を歩いていると私と隣に歩いている女の子を見て、「あんたらカップルみたいやな」と言われました。実はその頃、隣に歩いていた女の子の事が好きでした。言われた瞬間、嬉しい！の反面、どういう事？複雑な気持ちになりました。「私は何者だ？」の日々は続きました。

3年生になる頃には仲の良かったグループもみんなバラバラのクラスになり、私は特にどこかのグループに入る事もなく、一匹狼状態で、休み時間になると保健室が楽しみのような生徒になっていました。その頃の楽しみはと言うと、SNS で知り合ったソフトボール仲間とのメールのやり取り。そして、恋愛感情を抱くように。県外だったのですが、会いに行ったり、遠征で来ている試合を見に行ったり…。付き合っていたのかは分かりませんが、お互い好きだったと思います。真っ暗闇の中で、ほっぺたにキスをされたのがとっても嬉しかったことをよく覚えています。

こんな楽しみがある中で、学校ではみんな異性の恋愛相談。とても居心地が悪かった。そんな気持ちが抑えられなくなり、勇気を振り絞って、クラスの友人に相談しました。実は女の子の事が好き。自分の心は男の子だって。すると意外な言葉が…。

「自分の友達にもそんな子いるよ！！紹介してあげる！！」

「え！？何それ！？」となりました！！！！

その出会いは今までの私を変えました。LGBTを初めて知った日。その日以来、自分自身でLGBTの当事者を探してみたり、友人から紹介してもらったり、自分の居場所を求め始めるようになりました。

【ターニングポイントとなった18歳】

高校を卒業し、専門学校へ入学。一人暮らしを始めました。SNSで知り合ったトランスジェンダーの子が同じ学校だった事もあり、入学のタイミングでクラスへカミングアウト。周りは何も変わらず、私を受け入れてくれました。ただ1つ、更衣室だけは入れなくなりました。ですが、一緒に別の場所で着替えてくれる友人が居てくれたので苦しい思いは全くなかったです。そして、嬉しいことに自律神経失調症の症状もなくなっていました。

今までとは全く違う学生生活を過ごす中で初めて、彼女が出来ました。その子は以前もトランスジェンダーの彼氏が居た子。彼女の前では、歩夢と名乗り男性として振舞うことができました。

ある日の授業、自分の将来図をB5の紙に好きなように表現してみようと言う課題が。

先生の思わぬ発言で、自分のモチベーションは一気にどん底へ。

「男だったら結婚するのにプロポーズ！指輪をプレゼントするよな！プレゼントするのにお金いるぞー？女は貰う側だからそのお金はいらないね！」

クラスみんなにはカミングアウトしていたものの、先生には直接カミングアウトをしていなかったこともあり、自分自身はどちらの性別で将来図を描けば良いのが全く想像出来なくなりました。その紙は白紙で提出。それを機に、専門学校を辞めました。

自分が何者かまた分からなくなりました。彼女の前では男性。バイト先では女性。実家に帰れば、あゆみと言う女性として振る舞わなくてはいけない。そのギャップにも苦痛を感じるようになって実家に帰ることも辛くなっていた時でした。

【勇気を振り絞り…カミングアウト】

友人や彼女が背中を押してくれたこともあり、両親へカミングアウトすることに。両親の前で正座をし、自分が何者か分からない。それをハッキリさせたいから、カウンセリングに通わせて欲しい。多分だけど、最近よくテレビに出ている「はるな愛さん」の反対。自分は男性になりたいのと思う。

父は泣き、母は笑っていました。その場をすぐ去り、自宅へ帰宅する最中、母からは世間体を気にするあまり「実家に帰ってくるな」と言われました。父は「お前の家はここだけ。いつでも帰って来い」と。

母の気持ちを押し切り、すぐカウンセリングに通い、配られる資料をその都度実家へ置きに帰りました。何度かカウンセリングへ通ううちに、同一性障害と診断がおりました。私の心は晴れました。ホルモン注射を

打って、体を少しでも男性に近づける事ができますが、まだ、未成年なので親の承諾が必要になりました。

改めて母へ資料を届けに実家へ通いました。もちろんすぐにサインはして貰えず…。サインをして貰えなくても勝手にすると言いながら、何度も話をしました。決して母は許してはくれてなかったと思います。どんな気持ちでサインをしてくれたか。

両親のサインを貰ってからすぐに病院に行き、ホルモン治療が始まりました。念願の注射。始めの頃はよく分からなかったのですが、5本目頃から声がかすれ始めたり、血管が浮き出てくるようになってたり変化が見られるようになりました。とても嬉しかったです。ですが、その反面心の気持ちと身体の変化の早さに付いていけない自分も居ました。

20歳になり、名前をあゆみから歩夢に変更。そして、性別適合手術をしました。

【男性として、新たな人生のスタート！】

夢膨らませ、就職活動に望みました。ですが、すぐに大きな壁が。カミングアウトをして就職活動をするのか、しないままするのか。どちらも試しました。カミングアウトして面接に行くと、門前払い。せずに就職すると研修などのお風呂やトイレに入れない。カミングアウトせざるを得ない場面で、勇気を振り絞ってカミングアウトしたと思ったら…、

「お前は元女だからそんなにメンタルが弱いのか」とも言われたこともあり。社会的にもまだまだ受け入れて貰えないのだなと絶望し、内気になっていました。

そんな時、専門学校時代の先輩から連絡がありました。その方もトランスジェンダーの方でした。

「うちの会社、LGBTに理解があるからどう？」と。それが今の会社です。皆さんが恐らく一度は利用したことがある運送会社です。その会社は誰が何であろうと受け入れてくれました。そんな会社に出逢えたのもご縁だなと思っています。

現在もその会社で働きながら、多くの方にLGBTを知ってもらう為にパートナーと活動を行なっています。たくさんのセクシュリティーの方々に出会い、私の知らない世界がそこにはありました。「性は多様性」という言葉がありますが、本当にそうだと思い、日々「自分らしさ」とは何か追求しています。

【私の気持ち】

今の私はいつでも誰にでも、カミングアウト出来ます。何と言われようと私は笑い飛ばすことが出来ます。なぜかと言うと、今私の周りにはたくさんの支え、味方がいるからです。

たくさん嫌なことも言われ、嫌がらせを受け、信用していた友人を失いました。ですが、支えてくれるパートナーや家族、職場の仲間、カミングアウトしても一緒にいてくれる友人。そんな人達を大切にしようと思えることが出来たので今では笑いに変えることが出来ます。

男性に戻れたのだから、わざわざ自分から元女性ですと名乗る必要はないのではないか？

違うと思います。まだまだ苦しんでいる当事者がたくさんいる。その人たちのために誰かが前に出て声を上げないと世の中は良くならない。

変わらない！そう思うからです。

私は、今までに経験した事は「宝物」、そう感じています。ストレートの男性として産まれてきていたら、こんなに濃い27年間を過ごせていたのだろうか。こんなにも心を許せるパートナーと出逢えていただろうか。

今の人生、決して後悔はありません。次産まれてくるとしたら、また今の私として産まれてきたい。そう思えるほどです。

これからも自分らしく、ありのままの姿で、キラキラした人生を歩んでいきたいです。

恋愛はしなくてもいい、してもいい

青山

こんにちは、青山と申します。無事、華の5回生が始まってしまった龍谷大学の学部生です。ありがたいことに、宗教部さんよりLGBTQ サバイバルブックへの寄稿のお誘いがあり、僭越ながらお手伝いさせていただくことになりました。卒業できずに学生生活を満喫(泣)している身ですので、私からは大学生活の中で感じたことや思ったこと、考えたことをお話ししようと思います。就職活動に関してはほかの方に丸投げすることにしましょう(笑)。

まず私のセクシュアリティについてですが、一応レズビアンだと周りの人に説明しています。ジェンダー学やセクシュアルマイノリティを少しでも学んだことがあるような人には、aromantic homosexual (アロマンティック ホモセクシュアル) と名乗っています。これは、すごく大雑把に言うと、「恋愛感情はどの性別にも向かないけれど、性的欲求が向くのは同性」という意味です。「えっ、普通好きになった人と、身も心も一つになりたいものじゃないの？」と思われるかもしれません。私も自身のセクシュアリティを認識するまでは、世の中のそういう風潮に特に抗う気もなくそういうものだとして受け入れていました。どういう経緯でこのようなセクシュアリティを自認するに至ったのか、お話ししたいと思います。

私は、物心つくころから女性の体に興味がありました。この場合の「女性」とは、シスジェンダーの女性、つまり「出生時に女性と判断され、女性として生きている人」のことです。もっとも、私が相手を見て勝手に「この人の体は女性だ」と判断しているだけなので、実際のところ相手がどういうジェンダーなのかは分かりませんが。普段、目で追ってしまうのは肉付きのいいクラスメイトの女の子でしたし、お泊り行事の時はお風呂でいたたまれなくなって、眼鏡を外して周りが見えなくなっていました。周りの女の子たちが女性の体に興味がある素振りを見せないで、すでに自分が“一般的”ではないのかもしれないという思いはありました。

中学生・高校生のときは、ちょうど多くの人が簡単にインターネットに触れることができるようになった頃で、私は悩み事を相談できるサイトやSNSの投稿をよく見ていました。そのサイトで「同性 興味ある」とか、「同性 興奮する」などの検索ワードで、回答を片っ端から見て回るのが日課でした。私と同じような悩みを持つ女性は結構いるようで、サイトには「同性に興味を持ってしまって困惑している」といった質問がたくさん寄せられていました。回答の多くは「女性の体は客観的に見ても美しいものなので、女性が女性の体を魅力的に感じるのは普通だから大丈夫」という、今思えばすごく雑で主観的すぎるものばかりでしたが、私はその言葉を信じて「自分は異常じゃない」と思い込もうとしていました。

このように、「同性に興味を持つのは女性として普通なんだ！」と自分に言い聞かせていたものの、質問者の女性と私には決定的な違いがありました。質問者の多くは、男性のパートナーや配偶者がいたり、過去に

男性とお付き合いしたりした経験があり、その男性たちとは問題なく性的関係を結んでいたというのです。私は当時から男性に性交渉欲求を感じたことはなく、むしろできるだけ避けて生きていく術はないか、と考えていました。私にとって男性との肉体関係は、性指向が男性に向いていないことや、異性間の性交渉には妊娠の可能性が常に付きまとうなどの様々な理由から、どうあがいても私に何のメリットがなく、むしろ害をもたらすものだ、という認識を持っていました。このように、私にとってはただの「害」でしかなかった男性との性交渉を、質問者たちがごく普通にこなしているさまを見て、「この人たちができるんだから、嫌だ、嫌だと言いながらも私もいつか男性を受け入れなければいけないのかもしれないな」と漠然と思っていました。また、本当に「好き」な男性を前にすれば、この人になら「害」されてもいいと思えるほどの愛おしさやらを相手に抱けるようになるのかもしれないとも思っていました。

中学生・高校生の時は、「恋愛」について考えを巡らせ始めた時期でもありました。私の通っていた学校は女子校で、加えて、彼氏が出来ただとか、誰と付き合っているだとか、そういった話題がほとんど挙がらない環境でした。現実の「恋愛」に触れることがないまま、女性社会での「友達」付き合いが続いていきます。

中学生の時のクラスメイトたちは、だいたい「二人で一つ」の友達関係を築いていました。何人かでつるんだりはするけれど、一人の絶対的な親友がいて、その二人は互いに「一番の親友」としてパートナー関係を結んでいるように私には見えました。この関係を見て、恋愛も友情もパートナー制で、みんな性別に関係なく自分にとって「一番の人」を決

めているんだととらえました。

恋愛感情を持ったことのない私は、それまで、周りの大人や世の中の創作上の恋愛を見て、異性の中で一番仲がいい人を恋人にするものだと思っていました。しかし、カップルになる異性同士は、どうも、「仲がいい」レベルを超えた「特別」をお互いに感じているようだということが分かってきました。ここで、もしかしてその「特別」というのは性的欲求をお互いに向けあう関係なのではないかという考えに至りました。私は女性に性的指向が向くから女性と恋愛をすべき…じゃあ世の中の女性は男性に性的指向が向いているものなのか…？では質問サイトの人たちは一体…？

このように恋愛と性愛の関係性に頭を悩ませていたところに、同性同士でも「二人で一つ」の関係を作っていたクラスメイトたちを見て、やっぱり性的欲求に関係なく、仲良くしたい「一人」を決めるものなんだなと納得していました。

しかし、高校生になると、「二人で一つ」の関係はだんだんと無くなっていき、みんなでワイワイと話すような「チーム制」の友人関係になっていってしまいました。私の「人間関係は二人で一つ」という仮説は間違っていたということになります。

これが、私の「恋愛が分からない」という考えの根底部分です。未だに周りの人が何を根拠に恋愛関係を持っているのか分かりませんし、友人関係と何が違うのか分かりません。もし性交渉欲求をベースに交際をしているのであれば、後述する「ノンセクシュアル(恋愛指向は他者に向くが、性的指向が他者に向かない)」の説明がつかないですし、愛情の介在しない性交渉は世間ではありふれたものです。

とにかく、自分には世間一般的に言われている「恋愛感情」は存在しないということだけが分かったのです。

龍谷大学に入学し、2 回生の時に友人と一緒に参加した尾辻かな子さんの講演会をきっかけに、LGBTs 交流サークル「にじりゅう」をみんなで立ち上げました。「にじりゅう」では、牧村朝子さんの講演会を企画したり、ほかの大学のセクシュアルマイノリティーサークルと関わったりと、交流の輪が広がっていきました。「にじりゅう」メンバーとして活動していくうちに、セクシュアリティやジェンダーなどの性に関わる知識が増えていき、そこで aromantic という言葉に出会いました。A セクシュアル(A セク)という言葉なら聞いたことがある方もいるかもしれません。狭義の A セクは「どの性別の他者にも性的指向が向かない」というセクシュアリティです。性別や性的指向といった言葉の定義のあいまいさや、日本独自の名称である「ノンセクシュアル(ノンセク)」の存在のために英語圏と日本で意味にずれがあり、今や A セクは本来の意味より大きな枠組みとしてとらえられています。キリがないので、これ以上 A セクシュアル・スペクトラムに言及するのは、やめておきます。

この大きな枠組みとしての A セクの中に、aromantic というセクシュアリティがあります。aromantic 単体では「どの性別の他者にも恋愛指向が向かない」という意味になるので、heterosexual や asexual などの性的指向を表す言葉と組み合わせることで、「〇〇romantic(恋愛指向)・〇〇sexual(性的指向)」というように、恋愛指向と性的指向にねじれがある人もより正確に自身のセクシュアリティを表現できます。

確実に女性に性的指向が向いているけれど、いわゆる恋愛感情が他者

に向いているのかということ自信が無かった私にとって、この表現の仕方は非常にありがたいものでした。それまでは「ノンセクの逆」のセクシュアリティなんてどこにもいないのかもしれない、と不安に思っていました。自身の性のあり方に名前があることを知って、安心したことを覚えています。

大学生活を送っていて、自身のセクシュアリティに関してもう一つ大きな心境の変化がありました。あれだけ無理だと思っていた男性との恋愛・性愛関係……やっぱり無理でした。大学生ともなると男女恋愛をする人が周りに増えてきます。私に良くしてくださる男性と出会い、色々がんばってみようと試みたのですが、やはりどうしても抵抗感を拭い去ることができず、我慢してまでするのはやめようと思い断念しました。

実は、この時、私にはどうしても男性とも肉体関係を持てる人間でありたかった理由が存在したのです。

当時、「にじりゅう」メンバーとして活動していくうちに、浅学ではあるものの、フェミニズムについての知識が少しずつついていきました。それによって、今、私たちが生きる現代日本では、まだまだ男女の不均衡が残っており、男女平等の状態ではない、という考えを持つようになりました。全体の傾向として、女性は男性から一方的に性の対象としてジャッジされることは日常茶飯事で、性的に搾取されやすいという現状があります。

この世の中で、女性はただでさえ性的な目で見られることが多いというのに、同性である私からも性の対象にされるなんて不憫で仕方ない、という歪んだ自意識が自分の中に育っていました。未だに私はこの考え

から逃れられていません。

そして、女性に対して性的指向が向くのは止められないから、男性にも性的指向が向くようにして、私から男性をジャッジしてバランスを取りたい、という的はずれな考えに至ったのです。

こういった理由から、当時は男性とも性的関係を持ちたいと思っていたのです。しかし、前述のとおり、それが叶うことはありませんでした。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。私が短い人生の中で、一人相撲を取って考えてきたことが、読んでくださっている方に何かしらの参考になれば幸いです。

一般的な恋愛規範になじめないまま生きてきた私が皆さんにお伝えしたい事は、まず、嫌だと思ふことはしない、ということです。私の場合は男性との性交渉という具体例でしたが、世の中が良しとすることを無理にする必要はありません。最初は出来るかな、という気持ちでやってみても、途中で無理だと思ったら切り上げられる勇気を持って欲しいと思います。「やらないと周りから変だと思われる」という不安な気持ちと、「いや自分には無理だ、出来ない」という気持ちを天秤にかけてみて、それでも無理なものはやらなくていいです。どうして嫌なのかを分析してみるのもよいでしょう。嫌なポイントの性質によっては、どうしても出来ないということがあるからです。無理をして自分に何の得があるのかよく考えてみてください。

次に、どこかしら自分の考えや気持ちを吐き出せる場所を作る、ということ。サークルでもいいですし、Twitter でもいいです。自分の考

えを否定しない相手、一緒に考えてくれる相手は非常に貴重です。こういう仲間たちとは、お互い意見や情報の交換をしあっているので、社会に対する振る舞いの方針を決めやすいです。また、自分の居場所があるだけで、他人に心無いことを言われた時の耐久度が段違いです。

最後に、前段と重なるところがありますが、自分の事を開示するときは相手を選んだ方がいいと思います。人間はそれぞれ自分の価値観に沿って生きているので、それを揺るがすようなことを言ってくる人を拒絶しようとする場合があります。言いたいことを言えないのは心苦しいですが、この人は言って大丈夫な人か見極めないと、あなたが傷つくこととなります。個人的な感覚ですが、あからさまに差別発言してくる人は存外少なく、自分には差別しているつもりがないのに言葉の節々や振る舞いに違和感を覚える人が多いです。私を含めて。基本的に自分が悪であると認めるには勇気のいることですから。違和感を覚える相手でも、異なった意見の人の話に耳を傾けられる人は、「仲間」の素地ありだと思います。

長くなりましたが、私の話はこれで終わりです。こんなまどろっこしいことを考えている奴でも生きていけるんだな、と思ってもらえたら嬉しいです。

私が望む社会

堀 由栗加

私がこの冊子に寄稿したいと考えたのは、たくさんの人にLGBTQについて知ってもらいたいと思ったからです。そのためのきっかけ作りになればと思い、思い切って書くことにしました。

みなさんの周りには必ずLGBTQの人がいます。LGBTQの割合は11人に1人という調査結果もあります(電通2018)。つまり、学校のクラス規模(30人前後)で考えた時、1クラスに2、3人いるということです(ほとんどの人は、そのことに気づいていませんが)。多くの人が自分は異性愛者であることを、わざわざ言わなくてもいいように、本来は、自分が同性愛者であるということを、わざわざ人に言う必要はないのかもしれない。しかし、多くのLGBTQは自分の性的指向や性自認を「隠して生きていかなければならない」と感じています。そのため、マジョリティである異性愛者に話を合わせたりして、自分を偽り、必死に隠し通そうと考えてしまうのです。ですから、異性愛者と恋愛の話をするとき、自分が好きな対象を異性にすり替えて話したりしなければならなくなってしまうのです。このように自分を偽り続けるのはとても辛いです。その上、誰に相談していいのかわからずに、自分の中で苦悶し続けることになります。「自分を偽らずにありのままの自分をさらけ出したらいいじゃん」と思うかもしれません。もちろん私もそう思います。しかし、それはとても危険な行為であると言わざるを得ません。自分がセクシュアルマイ

ノリティであることを他人に言ってしまうことで、今いる自分の居場所がなくなったり、気持ち悪がられたりすることがあるのが現実なのです。

私が、実名で記事を書いたのは、自分がLGBTQであることを隠さなくてもいいような社会を実現したいと心から願っているからです。私はここに存在しているのだということ、あなたの周囲にもLGBTQはいるのだということを知りたいからなのです。最初に述べたように、11人に1人という割合でLGBTQは存在します。人権は、人数が多いから守らなければならないということではもちろんありませんが、これだけ多くのLGBTQがいるにもかかわらず、知識のなさや偏見からハラスメントや差別が実在し、見逃されてきたのです。同性間の結婚が認められていなかったり、当事者が社会での生きづらさにより命を断つという選択肢しか選べなかったりという状況に追い込まれることだってあります。私は誰もが過ごしやすい社会を望んでいます。自分の願いを叶えたい時や助けて欲しいと思った時に、アクセスできる安全地帯や、サポートしてくれる人が近くにいれば、状況は大きく改善されると思います。

前置きが長くなりましたが、少しアウティングについてお話して、それから自分の人生史をお話したいと思います。アウティングとは、本人の了解なく、第三者にLGBTQであることを話すということです。アウティングは極めて重大な人権侵害で、LGBTQに対する差別や偏見がある状況では、人の命にかかわる問題になります。私はアウティングにより自分が確立してきた居場所を失うことになったり、理解のない人たちによる偏見によって苦しんだりしたくありません。是非みなさんには、

そのことを常に心のどこかに留めておいていただきたいと思います。

さて、ようやく本題です。

私が初めて同性を好きになったのは小学6年生の時でした。その時は自分の感情が恋愛感情であることに気付かず、周囲の友達に好きな子について「あの子、可愛いよね」といった感じでずっと言っていました。しかし、ある友達から「え、ガチで好きなん？気持ち悪い」と言われました。私はその時「ガチで好き」という意味がよくわからず、ただ居心地の悪さを感じたのを覚えています。その時は好きな子と一緒に遊んだり、お話ししたりしたいなと思っていて、それが恋愛感情であることには気付いていませんでした。それまでは異性に恋愛感情を抱いたこともあったため、自分がテレビで面白可笑しく放送されている同性愛者であるとは思いませんでした。なぜなら、私も同性愛者に関して気持ち悪いといったイメージを持っていたからです。自分が、同性愛者側、マイノリティ側にいるのだということを簡単に認めることができませんでした。私が同性に恋愛感情を抱くということに気付いたのは中学校2年生の時でした。1つ年上の先輩が自分は同性も異性も好きになるということを私に話してくれました。私はそれまで男性は女性だけを好きになり、女性は男性だけを好きになると考えていたので、先輩の話に衝撃を受けたのと同時にスッキリした感覚がありました。その時に初めて自分が小学生の時の好きな人に対する感情は恋愛感情なのだということについて気付くことができました。しかし、小学生の時に気持ち悪いと言われた経験やテレビで放映される同性愛者に対する周囲の人たちの印象を見て、自分が両性愛者であるということは隠さなければならないと思いました。

その後、高校に進学し、仲の良い2人の友達ができました。その2人はよく恋愛相談を私にしてきました。度々、私に「好きな人はいないの？」といった感じで聞いてくるので、私は当時、同性の人に対し恋愛感情を抱いていたのですが、嫌われることが怖かったので「いないよ」と嘘をついていました。嘘をつき続けることは想像以上に大変で、私も誰かに話を聞いてもらい、分かり合いたいと思っていたので、その2人の友達に打ち明けようと思いました。しかし、私も当時カミングアウト(LGBTQの人が他人に自分がLGBTQであることを打ち明けること)の危険性について重く捉えていなかったため、予期せぬ展開になってしまいました。2人の友達は私の打ち明けた話を聞いて「気持ち悪い」と嫌な顔で言いました。友達は私の相談を聞くどころか、気持ち悪いとハッキリと言ったのです。「友達なんて1人2人失ったところで何てことない」ということにはならず、私は、頭の中でこの後に起こりそうなやっかいなことについてあれこれ考えすぎ、パニック状態になりそうでした。「2人が周囲に広めてみんなにいじめられたらどうしよう」、「学校に行き続けることができなくなったらどうしよう」、「お母さんになんて言おう。お母さんにまで嫌われたらどうしよう」などと様々なことを考えました。翌日、頑張って学校に行ったのですが、2人は笑いながら私のことを指さして悪口を言っていました。幸い2人とは違うクラスだったため、悪口を言い続けている様子を見ることを避けることができました。しかし、2人の顔を見かける度に「クラスみんなに広められたらどうしよう」と思い悩み続けました。その後、私を心配してくれた友達が1人いました。その子は先ほどの2人とも友達だったため、私がLGBTQであるということを知っていました。アウトィングされたことをその友達から聞

いたときは、最初は震えが止まりませんでした。しかし、その友達は 2 人とは全く違う反応をしてくれました。「よくわからないけど、そんな理由で友達やめたくないから、これからもよろしくね」と言ってくれたのです。私はその友達のおかげで救われたといっても過言ではありません。LGBTQ である私に味方はいないと思っていたので、その友達の存在が私の気持ちに光を灯してくれました。高校 2 年生の時にこのようなことが起こったので、高校 3 年生の時に 2 人と同じクラスになるのでは、と不安になり担任の先生に、詳しい事情は話さなかったのですが、2 人とは一緒にクラスにしないでくださいと頼みに行きました。高校 3 年生の時も、2 人のことがずっと気がかりでしたが、無事に何事もなく卒業することができました。もし、高校の時に私を理解してくれる友達がいなかったら、一人で思い悩み続けるしかなく、不登校という選択肢を選び、高校生活を楽しめなかったと思います。

私は大学に進学し、今、龍谷大学にいます。高校の時にカミングアウトで、嫌な経験をしたため、入学した当時は、大学では誰にも言わずにしようと考えていました。そんな私が、LGBTQ が生きやすい社会の実現を目指したいと考えるようになったのは、大学での講義がきっかけでした。人権についての講義や様々な講義の中で LGBTQ について学ぶ機会があり、LGBTQ の当事者であってもわからないことが多く、これから学んでいかなければならないと思うようになりました。現状では法的な整備が進んでいないこともあり、「LGBTQ であることを隠さなくてもいいような社会をつくる」という私の願いを実現させることはできないと思います。そのため、新たな社会を作りあげていくために、私にできることを続けていきたいときたいと考えています。諦めてしまえば生きづらいま

まで何も変わりません。将来の子どもたちが生きやすいと感じられるよう、私たちが少しずつ社会を変えていけばいいなと思います。もちろん、法律ができれば、すぐに社会が変わるとは思いませんが、法律は大きなきっかけになります。

最近、ようやく LGBTQ に関する話題が増え、人々の意識も変化しつつあるように感じます。パートナーシップ制度や LGBTQ をテーマにした映画やテレビドラマなどの作品が多く作られ、ニュース番組でも取り上げられるようになりました。大学で、私が LGBTQ 当事者であることを知り、LGBTQ について考えようとしてくれる人が増えてきたのはうれしいことです。今、私には自分のセクシュアリティのことで悩んだ時に気軽に相談できる友達が多くいます。今では自分が同性を好きになっても不安を感じることはなく、自分のセクシュアリティについて思い悩むことも少なくなってきました。周囲に理解してくれる人がいることで、私は私らしく生きていきたいと思うことに繋がっています。

LGBTQ についての情報が氾濫しつつある今、懸念される問題としては、理解した気になっている人がいて、LGBTQ 当事者の声を聴かずに自分の理解を固定化してしまうことです。「LGBTQ だからこうでしょ？」と決め付けるのではなく、一人ひとりの思いや考えを聞いてほしいです。ジェンダーアイデンティティやセクシュアリティは、虹のグラデーションのように、多様で誰もが異なっています。男女二元論をベースにした社会では、男／女という区分に捉われていて、「男はこうあるべきだ」「女はこうあるべきだ」というように決められてしまいがちです。しかし、時代の流れによって社会が変われば、男／女の役割も変わっていくものです。男らしさ、女らしさは固定的なものではなく社会の中で流動的に変わっ

ていくのではないのでしょうか。

誰もが自分の幸せを自由に追い求める権利があります。かつては考えられなかった、男性の看護師や保育士（以前は看護婦や保母と呼ばれていた！）、ベビーシッターなどは、今ではごく当たり前ですし、女性の大工さんや消防士もたくさんおられます。男は女を好きになり、女は男を好きになる、男は男らしくいなければならない、女は女らしくいなければならないという二元的な考え方がなければ、LGBTQ にとっても異性愛者にとっても生きやすい社会になるだろうと思います。“結婚＝幸せ”だと考える人がいるように、LGBTQ にも結婚を願っている人は多くいると思います。私はLGBTQ が生きやすい社会になるようにまずは法律で同性婚を認めることで理解を広げ、それが男女二元論から多様性を認めあうことに繋がり、多くの人の幸せに結びつくだろうと考えています。これからの社会が誰もが生きやすい社会になっていくことを信じて、希望を持っていこうと思っています。今に不満を感じる人たちも社会を変えるにはどうしたらいいのだろうかと考え、みんなで生きづらさを減らしていきましょう。誰かの変わろうとする気持ちが未来に繋がっていきます。変えていこうとする中で壁にぶち当たることがあると思います。それは思いが通じないということではなく、通じるには時間がかかるということです。その時には周囲の人に頼りましょう。あなたの確固たる思いが周囲の人と自分を結び付けることに繋がり、大きな力となり、社会を変えることに繋がると思います。あきらめずに、ゆっくりと一緒に頑張っていきましょう。

自分の気持ちを受け入れる

にし

はじめまして、にしと申します。この春、龍谷大学国際学部を卒業し、現在はメーカーで働くかたわら、好きな絵を描いています。ご縁があって寄稿させていただくことになりました。テーマが「みんなのキモチ」ということなので、私の性自認や性的指向に関することや、学生生活で感じたこと、また就職して半年間仕事をしてきた中で感じていることなどを自分なりにお話しできたらと思います。

まず、私の性自認や性的指向ですが、今は、「女の人が好きな女(一応)」、一言でまとめるなら「レズビアン」だと思っています。なぜこんな言い方をするのかというと、最近自分のことを60%ほどしか女(残り40%は何か自分でもよくわからない)だと思っていなくて、はっきりと「これだ!」と言い切れないのが私の現在の状況だからなのです。今でこそ自分の事をレズビアンと表現していますが、以前はバイセクシュアル(両性愛者)だと思っていた時期もありますし、ヘテロセクシュアル(異性愛者)だと思っていたこともあります。

ありがたいことに、小さい頃から親に「女の子らしく」ということを押し付けられたことがなく、女の子向けのアニメも男の子向けのヒーロー物も同じくらい大好きで、母親に男の子向けの雑誌を読み聞かせてもらっていたほどでした。

小学生の頃は少女漫画をよく読んでいたので、いつか結婚して子ども

と一緒に暮らすのだらうという、ぼやっとしたイメージは持っていたし、当然女子は男子と付き合うものと思っていました。同じクラスの男の子のことが気になったこともあります（今思えば恋だったのかどうかよくわかりませんが）。学校では特に嫌なこともなく楽しく過ごしていましたが、小学校の高学年～中学生あたりから自分のアイデンティティのようなものが揺らぎ始めていたように思います。

中学生になると妙な生真面目さや性格が災いしてか、学校に馴染めなくなってきました。男子生徒からよくからかわれたり、授業中にふざけて騒いでいるのを見たりしていたので、男子にあまりいいイメージを持ってませんでした。かといって女子とも仲良くできるかというところでもなく、女子独特のカーストのようなものが嫌で、同じクラスで一度もしゃべらなかつた人もいます。それでも多くはない友人の中に、特に仲の良い子が一人いました。彼女とは小学校からの友達で、学校への行き帰りはいつも一緒でしたし、趣味が似ていることもあってよく遊んでいました。はじめは仲の良い友人、むしろ親友だと思っていたのですが、次第に私が彼女に抱いているものは友情以上の感情ではないのかと感じ始めました。それが恋愛感情だという根拠はありません。ただ、自分の感覚とこれまで見てきた恋愛ドラマや恋愛漫画のイメージに照らし合わせて、これは恋だと感じたのです。今思うと恋愛というよりは依存に近いものだったのかもしれませんが、当時の私は、この感情を恋愛だと思って彼女に告白しました。その時に返ってきたのは「付き合いたいという事は、手をつないで抱きしめて、それ以上のこともしたいってこと？」という言葉でした。私としては、彼女と性的な関係を持ちたかったから告白したわけではなく、ただ一緒にいてほしいという気持ちし

かなかったのととても驚きましたし、告白というものはそういう意味で取られるのかとも感じました。結局付き合うかどうかは有耶無耶になり、わからず仕舞いでした。この出来事がきっかけで私は女性のことを好きになるのだと気づき始めたのです。ちょうどその時期に中学校の保健体育の教科書に「次第に異性同士でお互い協力的になる、意識するようになる」という文面が書いてあったのを見て、ものすごく居心地の悪さを感じたのを覚えています。クラスの女子生徒と恋バナになって、好きな男子がいないと答えると驚かれたこともあったし、技術の授業で作る物の色を選ぶとき、私は純粋に好きな青色を選んだのですが、私以外のほぼ全女子がピンク、男子が青色を決まったように選んでいたこともありました。男子はこういうもので、女子はこういうもの、異性と付き合うもの、というステレオタイプは、中学生くらいの頃に植え付けられてしまうのかなと今になって思います。

高校に入ってから、中学の時のクラスメイトがほとんどいなかったこともあり部活動やクラスでの友達も増え、なかなか楽しい高校生活を送っていました。この時も私は女性を好きになるという自覚を持っていたのですが、同時に男性も好きになるはずだとも思っていました。そのため、どこで言葉を知ったのか思い出せないのですが、自分のことをバイセクシュアルだと感じていました。ただ、男性にも恋愛感情を抱く（はずだ）という認識は、本当に恋愛感情を持てるという自覚よりも、異性に恋愛感情を抱く世間一般の“普通”を保つために、恋愛感情を持つことができる、自分を信じ込ませていただけだったように思います。同性しか愛せない“普通ではない人”になってしまえば、“一般の人”にはなれない、そう思っていました。当時から LGBT という言葉は軽く知って

いて自分のことをバイセクシュアルと認識していたし、特段、それについて差別するとか差別されるとかいうことを意識したことはなかったのですが、“普通ではない人”だという認識を知らず知らずのうちに持ってしまっていたのだと思います。男性とも恋愛することができれば、人との恋バナにもついていけますし、女性とも恋愛できるという事を言わなければ単純に異性愛者として見られるので、どこか自分の中で“私は一般的だ”と安心していたような気がします。元々私が左利きなので、少数派という目で見られていたり、あまり世の中の“普通”に馴染めないような性格だったりというのもあって、“普通”でいたいという気持ちが余計にあったのかもしれません。

大学に入ってから、しばらくはバイセクシュアルとして過ごしていたのですが、「にじりゅう」で活動するようになって自分の考え方が変わる事となります。

龍谷大学LGBTs交流サークル「にじりゅう」は、2016年から活動を始めた学生グループです。今までの経験からLGBTやジェンダーに興味があったので、設立されたばかりのこの団体に参加することとなりました。

「にじりゅう」のメンバーや他大学の学生たちと交流して気づいたのは、LGBT当事者と、それ以外の人を分ける必要などない、そもそも自分が考える“普通”なんてものは大した意味をなさないという事です。「にじりゅう」で出会った人たちはみんな、本当に多様な考え方を持っていて、私が今まで“当たり前だ”、“普通だ”と思っていたことはいい意味で覆りました。また、知らなかったこともたくさん教えてもらいました。自分だけの考え方で他人のことを判断するべきではないこと、そして私自

身に対しても「もっと正直に生きてもいいんだ」と思えるようになりました。「にじりゅう」での経験だけではなく、大学という環境も私の視野を広げてくれました。地元の学校という狭いコミュニティの中で、試験の為に勉強し生活していた私にとって、他府県や海外の人と交流し自分の知らないことを知ることができたり、試験のためではなく自分の好奇心の為に勉強することで何かを学ぶ楽しさを知ることができたりしたことは本当によかったなと思います。

さて、ここまで自分のことについて話してきました。学生生活で、いわゆるセクシュアルマイノリティであるという事で、傷ついたり傷つけられたりしたことがあったかなあ、と考えてみたとき、幸いにも私にはそういう経験はありませんでした。私がそれほど「当事者」という意識を持っていないことや、ほとんど人にカミングアウトをしていないという事もあるのですが、部活の先輩などにカミングアウトしたときも特に何を言われるでもなく普段通りに接して下さったことにはとても感謝しています。

マジョリティの人からすると、マイノリティの人はきっとマイノリティであることで傷ついているに違いない（私もそう考えていました）と思われるかもしれませんが、私自身がそのようなことを感じた事がなく、おかげで今も能天気生活しています。

ただ、困ったこと、もやもやすることはどうしても出てきてしまいます。親戚の間で結婚などの話題になった時は、うまく誤魔化しながらなんとかやり過ごすようにしています。友人などに自分のセクシュアリティがばれても最悪その時はその時だと思っているのですが、親戚には自

分のことを知られたくないので、テレビなどに出てくる男性俳優のことをわざとカッコいいねと言ったりしています。

ところで、大学では「にじりゅう」以外にも部活動をしていて、その部員証に男女欄が設けられていたことがどうしても疑問でした。私は女性ですが自分のことを女であると認めることも何か違うと感じているので、大して必要な情報でもないのになぜ表記しなければいけないのか疑問に感じていました。これに関しては現在性別欄が無くなったようで、驚いています。

就職して半年になりますが、男性が多い業界ということもあって、固定的なジェンダー観に違和感を覚えることは多々あります。たとえば、重いものを持つ機会が多いので、社員同士の会話で次の新入社員は男手が欲しいという会話を時々聞きます。女性に仕事を「させる」という表現を使っているところを見たこともあります。女性と男性では、身体的に筋力に差があるのはある程度仕方ありませんが、力があるないは個人差だと思し、決めつけるのはどうかと思います。新卒で採用された私としては「男でも女でもなくて悪かったな」という気持ちです。そういう発言を聞くと無性に悲しくなります。先ほどの「女性に仕事をさせる」という言い方は書類の文面で見ただけですが、さすがにこれはどうかと思います。指摘しようとしたところ、ある社員さんが先に指摘をしてくださいました。その他の社員は気づいてもいない様子だったので、そのような事に気づいてくれる人がおられると思うととても嬉しい気持ちになりました。出張で、ある商談会に行ったときのこと。ほとんどの方がおそらく男性で、女性と思われる方はごく僅かでした。業界柄もあるとは思いますが、思っていた以上に偏ったジェンダーバランスで、とてもびっく

りしてしまいました。さらに、上司からは、「女性がにこやかにしているほうが、他の会社の方に声を掛けられやすい」といわれたこともあります（アルバイトの時も似たような発言を受けました）。にこやかに話しかけられやすい雰囲気をつくるのに性別なんて関係ないのに。上司が悪気など全くない様子で話しているので、余計にやるせない気持ちになります。セクシュアルマイノリティに関する知識を知ってもらう以前に、男女間での溝のようなものがそもそも埋まっていないのが現状なのだといえ、今更ながら身をもって感じています。

大学や会社で、LGBTs などのマイノリティを、特別扱いをしてほしいとは思いません。むしろ左利きのような存在になりたいのです。少し触れたように私は左利きです。左利きは右利きと比べればもちろんマイノリティですが、嘲笑されることもなく、「あ、そうなんだ」くらいの反応です。もちろん日常生活で困ることはありますが、何でもかんでも困っているわけではありません（私は使うものに応じて左右の手を使い分けることもあります）。本当に人によってそれぞれです。「左利きってすごいよね～」と言われることもあります。右でやっていることを左手でやっているだけなので何もすごいことはありません。私にとって左利きとは私を構成する沢山の要素の一つでしかないのです。同じように私が女性を好きな女性であることは私の構成要素の一つでしかありません。人によって悩みはそれぞれですし悩みがない人もいます。左利きのようにマイノリティだとしても特に気にされることもないような存在になればいいのにな、と感じます。

私はおそらくこれからも自分が誰で誰を好きになるのか、そもそも好きになれるのか、よくわからないまま、ゆるゆると向き合い続けていくのだろうなと思います。「自分はこうでなくてはいけない」と決めつける必要はなく、その時の自分を受け入れてあげたいものです。そしていつか、セクシュアリティのことを気にせず、ありのままの自分でいられるような社会になればいいなと思います。

自然に生きる

ぜん

どうも！ ぜんと申します。セクシュアリティは分かりやすく言えばゲイで、家族や友人など信頼している人にはカミングアウトしています。ちなみに24歳(数えて25歳)で世に言う厄年です。そろそろ体力の衰えを感じています(?)。あっ、タイトルは『自然(じねん)に生きる』と読んでください！

僕はこの春に龍谷大学を卒業して、今は佛教大学で大学院生をやっています(修了できるかは未定です…)。大学院では社会学を専攻していて、龍大では仏教学科に在籍していました。元々“臨床宗教師”になることを目指して入学したつもりが、卒業論文のテーマは異色の「天狗と仏教」になったり、いろんな大学へ「性に関する講演」に行ったり、学内で7つのバイトを掛け持ちしたり、イベントをイチから立ち上げたりと、僕の大学生活は、それはもうハチャメチャで……そしてとても充実した4年間でした(笑)。ですが、僕は大学に入るまで、こんなに面白い人生が送れるなんて思ってもいませんでした。「どう生きていくんだろう?」、「どう生きればいいんだろう?」何も見えない真っ暗闇で、ただ塞ぎ込んでいた10代の頃の僕。おそろおそろ飛び込んだ大学生活で得たたくさんの“つながり”が、僕の“生きかた”をつくっていきました。そこで、今までの人生の振り返りも兼ねて、ここに書き記してみたいと思います！

【幼少期から思春期まで】

僕は、物心ついたときには既に「男の子が好き」という自覚がありま

した。幼稚園の頃だと周りもそれを微笑ましく見守ってくれていて、何の違和感も無かったんです。でも、小学生になる頃には同級生から「それってヘンじゃない？」と言われるようになっていって。家族との会話やテレビの影響でしょうか、思春期を迎える頃には「気持ち悪い」「おかしい」といった言葉が飛び交うようになりました。先生も「変なカンケイ」なんて表現を使うし、やがて僕は「これは言っちゃいけないことなんだ」と思い始めました。

とは思いながらも、僕が小学生の頃にはもうインターネットが普及していて学校でも授業があるくらいでしたから、ネットを使い“男 好き”で検索して“ゲイ”という単語に辿り着いたことを覚えています。用語はその人のすべてを表せるわけではないし、良くない固定観念が生まれることもあります。自分が何者か分からなくて不安なときには少し落ち着けるし、なにより仲間を探しやすい利点がありますね。

そこからは“ゲイ”をキーワードに、たくさんの情報を調べました。言えないから隠れて生きるしかなくて、周りにいないように見えること。雑誌があること。バーや掲示板を使って会えること。啓発活動が行われていること。けれど「同じゲイの人と話してみたい」と思っても、どの方法も小学生には難しいこと。特に、イベントが開催されるのは都会ばかりで、僕が住んでいる田舎では仲間を見つけることすら難しいことが分かりました。

この頃、僕は学校生活が上手くいかない日々が続いて、不登校になりました。ゲイであることが直接的なきっかけでは無かったはずですが、どこかで“居づらさ”や“不安”を感じていたのかもしれませんが。

【中学とネットラジオ】

不登校を引きずったまま中学生になった僕は、どんどんインターネットにのめり込んでいきました。そんなあるとき、ネットラジオが流行り始めます。YouTuber の先駆けみたいなもので、中高生を中心に広まっていました。なんとなく自分もやってみたくなって、せっかくなら、と「ゲイの中学生と雑談しましょう」なんてタイトルで始めてみました。とても見せられる顔では無いからカメラをオフにして真っ黒な画面で(笑)、自分の声とBGM だけで。すると意外にも人が集まって、僕が欲しかった仲間が… “つながり” ができはじめたのです。そこではいろんな話が飛び交いました。誰かが幼い頃に傷ついた話や大人になってからも悩んでいる話、好きな人ができて告白したいけどできない話、学校に行きづらくて将来が不安な話などなど。「ああ、僕だけじゃなかったんだ」と思えるような体験談をたくさん聴いて、僕も話して、「話を共有できる“居場所”があるだけでこんなに気持ちがラクになるんだ」と感じました。同時に、多様な生きかたを知ることができて、いわゆる“ロールモデル”を探す場にもなりました。中にはキケンなお誘いも多々ありましたが、それを上手くかわす技術も覚えましたね(笑)。

少しだけ社会的になった僕は最後の一年だけ教室に戻って、嫌なことがあったらラジオで報告する毎日を過ごして…。気付けば、高校生になることができていました。

【告白、コンプレックス】

高校に合格したときは親も先生も大喜びで、僕自身、大きな自信を持つことができました。不登校のとき、高校生にはなれないと思っていた

自分が、新しい環境でイチからスタートできる。親元を離れて寮生活。インターネット好きのオタク系のクラスメイトたち。とにかく楽しい高校生活が始まって、ようやく未来が拓けた！ そう思いました。

半年後、ある事柄をきっかけとして、僕の人生は一番の分岐点を迎えます。それは単なる告白でした。

「好きです」

別に付き合いたいなんてワガママを言うつもりはなくて。結果だけ言えば、次の日には寮全体に、そしてクラスにも“僕がゲイであること”が広まっていて、一日中楽しかった高校生活が一転。逃げ場の無い地獄に変わってしまって…疑心暗鬼から孤立してしまった僕は、パニックを引き起こします。一週間後、寮の自室のベランダから飛び降り自殺を図りました。

相手は同じ新入寮生でした。誰よりも努力家で、同級生や先輩の誰からも愛される人です。勉強も部活も人一倍励むし、強い意志を持っていて、それでいて茶目っ気もあって。笑顔がとても素敵で、いつも仲良くしてくれる彼に僕は好意を抱くようになりました。

ただ、僕の好意はまったくの純粹なものではありませんでした。なんでもそつなくこなせる彼と、不器用な上なかなか対人恐怖から抜け出せない僕。どれだけ頑張っても追いつけない差を感じて怠惰を続ける僕と、泣き言一つ言わずひたすら努力を積み重ねる彼。大好きなことには違いないし傷つけたいわけでもない。でも心のどこかで、彼が少し慌てる様子を見たい気持ちがありました。文化祭で大変な役職に指名されて、気持ちに余裕がなくなっていたことも影響していたと思います。彼は何にも悪くなかったんです。それでも僕の中の嫉妬や憎しみ、そして愛着や

欲求がドロドロとした感情になって抑え切れなくて、文化祭が終わった数日後、ついに告白してしまいました。「好きです」、平静を装いながら彼に伝えました。それは、ゲイであることも含めて、幼少期から抱き続けていたコンプレックスが溢れ出した瞬間でした。

笑って流してくれればいい、きっと彼ならそうしてくれる。思った通り、その場で彼は「そっか」と笑ってくれました。これでいつも通りの関係のままだ、よかった…と、僕は勝手に気持ちを押し付けたまま、一人安堵していました。

【疑心暗鬼】

翌日、彼からメールが入りました。「ごめん、一人じゃ抱えきれないから友達に相談してもいい？」僕はそれだけ彼を悩ませてしまっていることに罪悪感を覚えて、彼が信頼している友達なら大丈夫だろうと「いいよ」と返しました。その後、ウワサは尾ひれがついて一斉に広まってしまったんです。寮の食堂で顔を合わせて食べないといけないとき、ある同級生が大きな声で言いました。「この中に男好きなやつがいるんやって」僕はなるべく平常心を保とうとして、「それがどうしたんや」と笑って流しました。これが、逆効果でした。

「なんで俺はこんなに悩んでるのに、アイツは笑ってるんだ」

告白を受けた彼がそう言ってたと、共通の友人が教えてくれました。彼は僕への態度が一変し、会話を交わすことは無くなり、すれ違っても目も合わせず、同じ空間にいることを拒否するようになりました。

周囲の友人たちも、僕から離れていきました。「なにがあっても味方やから」と言ってくれる友人もいましたが、僕は信じられませんでした。

もう、何をしようと手遅れでした。

最後は寮の自室に閉じこもるようになりました。告白しなければよかった。問題の本質なんて分からなくて、ただ後悔だけが残りました。久々にネットで相談してみると、心配してくれる人もいましたが、助けを求めることなんてできない。むしろ、「誰にでもあることだから甘えるな」、「乗り越えないといけない」といった意見を目にして、ますます追い込まれていきました。

本当に死にたいわけじゃないのに、どうしようもなくなって、泣き喚くだけの頭をとにかく落ち着きたいとベランダから身を乗り出し……。

・・・。

そのとき、偶然にも親から電話が入りました。少しだけ意識を取り戻して電話を取ると、「君のセクシュアリティのことはひとまず置いておいて、実家に帰ってきなさい」と伝えられ、みんなが授業を受けている間に荷物をまとめて寮を出ることになりました。

親には告白からの一連の流れを相談していました。相談できる親子関係であったことは、幸いにも、というよりは「ただ運が良かった」だけなのですが、結果として、最期の選択を踏みとどまることができました。

【思うこと】

僕は高校を辞めました。たとえ寮を出ても、このまま耐え続けて学校生活を送れるほど僕は強くないと思ったからです。親や先生はとても残念がり、なんとか思い直せないかと話を重ねましたが、たぶん、誰よりも学校を辞めたくなかったのは僕なんです。せつかく不登校から脱却し

たのに。せつかく第一志望に受かったのに。大好きな専門の授業と、面白い友人や先生たちと、楽しい寮生活と出会えたのに。全部自分が壊してしまった、自分自身のコンプレックスで。良くも悪くも、本当に夢のような時間でした。

担任の先生には、理由を話せませんでした。次の高校に単位を持ち越そうとしていたので、変なバイアスがかかって不都合が起きたら困ると思ったからです。実際はとても良い先生だったのですが、とにかく当時は疑心暗鬼でした。その後、僕が辞めた高校では先輩との上下関係を厳しくしないように指導がおこなわれたそうです。それは、僕が辞めた理由を「寮生活で起きた上下関係のトラブル」と勘違いしたからです。僕が本当の理由を話さなかったから。けれど、本当の理由を話せない環境が、そこにはありました。

もしかすると、僕と同じように学校や職場を辞めた人は、たくさんいるかもしれません。本当の理由を言えないから、表向きのウソだけ伝えて。“見えない”からといって、決して“いない”ということではないんです。

それから何度か、彼が夢に出てきました。夢の中で僕は泣きながら謝るときもあれば、また一緒に笑いながら遊んでいるときもあります。僕は悪くない、だから強く生きていいんだと思いたくても、心はそう思わせてくれなくて。

告白することは悪いことじゃない、それが同性同士でも。けれど、僕に自己中心的な感情があったことは確かです。少しでも、相手を困らせたいと思ってしまった。もっと僕に自分のセクシュアリティを説明する

力があって、自身を肯定する力があつたら。もしくは彼に受け流せる余裕があつたり、どう処理するか情報があつたりしたら。お互い、それを学ぶことができる環境で過ごせていたら、きっと結果は違ったんだと思います。

いつか謝りたいと思っていますが、それも自己満足なのかもしれません。彼が今、傷ついているのか、憎んでいるのか、それとも忘れているのか分からないけれど。今の僕にできることは、昔の僕と同じように孤独やコンプレックスを一人で抱えている人が、なるべく一人にならないような取り組みをすることだと思っています。あとは、自分自身も“つながり”を持って、決して一人にならないこと。コンプレックスは消せないなので、上手く付き合っていきたいと思います。

このパートはこれで終わりですが、最後に一言だけお伝えしたいと思います。僕は、あの高校も、友人も先輩も先生も、そして彼も、大好きなんです。

【ドン底期】

なんだかちょっと重い雰囲気になってしまったなら、ゴメンナサイ。元の不登校よりも大きく挫折してしまった僕ですが、無情にも人生は続きます(笑)。

実は辞めた高校ではカウンセラーさんに自分のセクシュアリティを話していて、辞めるまでの流れも相談していたのですが、その時にこんなアドバイスをしてくださいました。「別の学校で担当しているセクシュアルマイノリティの子が親子で参加しているNPOの会合がある」と教えてくださったのです。決して強制ではなく、無理のない範囲で行ってみる

のもいいんじゃないかとの提案でした。お子さん、親御さん共々「協力できることがあればぜひ」と助言され、このまま塞ぎ込んでいても仕方ないと感じた僕は、母に頼み込んで一緒に参加してみることにしました。

そこではまったく同じではなくても、近い悩みを持つ人が集まっていました。いろんな体験をしている人がいて、共感できることや初めて知ることがたくさんあって。年が近い大学生の人たちと仲良くなり、一気に世界が広がりました。ネットだけでは埋められなかった孤独が、少し埋まった感覚でしたね。「一人じゃないんだ」、「こんな生きかたがあるんだ」と思えました。

大学生の人たちはいわゆるセクマイサークルに所属していて、中には自分で立ち上げた人や、代表を引き継いだ人もいました。ですがみんな大変そうで、サークル内では吐けない愚痴をそのNPOの集まりで共有していました。それでも居場所を維持しようと奮闘する先輩たちの姿を見て僕も何か手伝えたら…と思いましたが、ド田舎に住んでいた自分は往復の時間や交通費がかさんでしまうため、何もできませんでした。

次第に、どの集まりにも参加しなくなっていました。それだけ“住んでいる地域”というのは、孤独感に大きく関わって来ます。ただ、後述のSNSの影響もあって、集まりに行かずともだんだん自立できるようになっていきました。

【大学生になりたい】

同時期に、別の高校に転入した僕は…スクールカーストに絶望して、またも中退しました(笑)。ですが学費が安い通信制の高校を見つけ、週末の授業以外は大学受験勉強に励み始めます。このとき17歳。そして高

卒認定資格を取得したり、ネットラジオを再開したりで、徐々に自信を取り戻していきました。将来を考えるとどこか数年先のことも考えられませんでした。NPOの会にいた大学生の人たちに憧れて、“大学生になる”ことを目標に頑張ることにしました。

18歳の年は、某つぶやきSNSで同年代のゲイと交流を始めました。その青春姿にまたもコンプレックスが発動したわけですが(笑)、今度は「(青春っぽく)アルバイトをやってみよう」と上手く昇華できました。このアルバイトも僕に大きな自信を与えてくれました。3日で辞めるつもりが何故か軌道に乗ってしまって、本社から表彰されるほどでした。そして貯まったお金で一人旅をして、ネット上のゲイ友達に会いに行き…アルバイトも一人旅もトラブルが無かったわけではないのですが、それも含めて視野が広がった1年間でしたね。

勉学のほうはというと、通信制高校を無事卒業できたものの大学受験には失敗してしまい、19歳の年は浪人生活を送ることになりました。ですがアルバイトをしながら勉強というスタイルは変わりません。変わらないということは別段学力が伸びるわけでもなく…(笑)。この頃になるとバイト仲間と仲良くなって、遊びに行ったりBBQしたり青春を謳歌でき、勉強以外は大体上手くいくようになりました。ネガティブな自分を多少は擬態できるようになったので(笑)、「いよいよ大学に進む準備ができたな」といった感じでした(何度も言いますが偏差値的にはまったく準備ができていませんでした…)

【家庭環境】

ここで少し話を変えて、僕の家庭の話をしていきます。僕が不登校になり始

めたとき、厳格な父と心労を抱える母(と遠方の大学に進学した兄)というよくある家族だったのですが、関係はあまり良くありませんでした。

僕は小中学生の頃、特に隠すこともなく「〇〇くんのことが好き」と言っていたこともあり、家族にはなんとな〜くカミングアウトしている状態で、半分冗談のように扱われていました。ですが、僕が好きな子の話をすると黙ってしまったりとか、テレビに同性愛を公言する人が出ているとチャンネルを変えたりとか、だんだんと腫れ物に触るような扱いになっていきました。

最初の高校に入学したとき、家族はとても喜んでくれました。「不登校を克服したんだ」、親も僕もそう思いました。しかし、前述した大きな出来事が起こったことで僕は引きこもりに逆戻りしてしまいました。しかもその理由がなるべく触れないようにしてきた“ゲイであること”だったため、親は相当悩んだことと思います。

寮から家に帰って数日後、ドン底だった僕に、母が教えてくれました。「中学のカウンセラーさんに、あんたがゲイであることは触れないでって言われたんよ」。僕が中学で不登校だった頃、ベテランのカウンセラーさんにカウンセリングをしていただいております、母も不安でいっぱいだったため一緒に受けることもあれば個別で受けるときもあったのですが、個別のときに「息子がゲイと言っているんです」と相談したそうです。

それに対し、カウンセラーさんは「悪化しますから触れないであげてください」と答えたのだそうです。また、別のカウンセラーさんは「お母さん、長くなりますよ、覚悟しておいてください」と答えるだけだったそうで、母は言われた通り、その日を境に腫れ物のような対応をする

ようになりました。結果、その腫れ物は大きな傷跡になってしまったわけです。

そのときのカウンセラーさんは多くの生徒を同時に診ており、心労や負担がかなり大きかったはずですが、今でこそ LGBT 研修なんてものがありますが、きっとそういった知識を学べる場も無く、それぞれに精一杯答えていただいた結果だったのかもしれませんが。知る機会が無かったのは、僕も親もカウンセラーさんも同じだったのです。

一方、高校のカウンセラーさんは成り立ての方でしたが、幸運にも当時の僕にとってベストな意見をいただきました。経験年数ではなく知る機会を得られたかどうか、本当に運とタイミングの問題だと感じました。

母はその後 NPO の集まりに同行したことで、セクシュアルマイノリティ関連のテレビ番組を見てくれるようになりました。ちょうど流行り始めていた時期だったのが幸いでした。僕も一緒に見るようになり、次第に“ゲイであること”を話し合うのはタブーではなくなりました。

父とはこのときはまだ折り合いがついていなかったのですが、アルバイトを始めたことや無事に高校を卒業する様子を見て、「君が楽しく頑張っていたらそれでいい」と言ってくれるようになりました。浪人生活で家族間の会話が増えたのが、良い方向に作用したのかもしれませんが。

【夢の始まり】

そして。高校卒業資格は取った。バイトをやり遂げた。ゲイ仲間ができた。家族関係も良くなって…やっぱり勉強は上手いかない、そんなときに。親が観ていたドキュメンタリー番組をきっかけに、宗教を学び

たいと強く思うようになりました。手元にはある大学のパンフレット。親が偶然、取り寄せたものでした。これしかない！と思い、そこの仏教学科を受験することにしました。文字通り人生をかけたチャレンジでした。入試ではかなり緊張しましたが、なんとか合格。僕は夢だった大学生活を始めることになりました。この、龍谷大学で！

2015年。入学式の前日、僕は念入りに準備をしていました。何の準備かという、僕の“設定づくり”です。不登校だったことは多少言っても大丈夫だろうけど、ゲイであることは絶対に誰にも話しちゃいけない。高校の体験から、無意識にそう考えました。

ただ、一番のネックだった対人関係は案外上手くいきました。最初の数か月は友人ができるかみんな不安な時期なので、基礎演習の授業やサークルなどをきっかけとして、かえって友人をつくりやすかったです。また、高校までの学校生活と違ってとにかく自由で。空きコマや放課後に友人とご飯を食べたり、疲れたら1人で休んだり。「毎日学校へ行く」というのが久しぶりだったので気力も体力も消耗しましたが、なんとか持ちこたえました。都市に出たことで、ネットのゲイ友達と気軽に会えるようになったこともプラスに働きました。

半年後には学内でアルバイトを始め、その半年後には念願の1人暮らしも始まって。入っていた部活では後輩ができて、身体を鍛えようとジムにも通い始めました。そんなある日、またも大きな転機が訪れます。

【ご縁】

大学のある部署を部活の用事で訪ねたとき、1枚のポスターを見かけ

ました。“セクシュアリティと多様性社会”と題した講演会のお知らせ。すっかり大学生生活に染まっていて、それなりにゲイ友達もできていた僕は「ああ、そういえば昔こういう番組見てたなあ」程度に思っていたのですが…その講演会のゲストはアクティビストとして有名な方で、さらに、僕がドン底期に母と行った、あのNPOの会長の娘さんだったんです。なんだか……すごい縁を感じました。そして、

「このポスターを貼って、しかも共催してるくらいだし、この部署の人にはカミングアウトしてもいいんじゃないか」

ふと、そう思えました。

大学で、かつ職員さんにカミングアウトするのは初めてでしたが、諸々の経緯を話して「ゲイなんです」と明かしたところ、大変慌てた様子ながらも(笑)、とにかく笑顔で受け容れてくださいました。「君みたいな子が来るのを待ってたんやー！」と言われたときの顔は、これから先も忘れなと思います(笑)。その部署こそが宗教部で、この冊子を発行していただいている部署でもあります。

加えて、こう提案されまし

RAINBOW FREEDOM COMMUNITY
GAY RIGHTS LESBIAN BISEXUAL
SEXUALITY
TRANSGENDER
LOVE ALLY HAPPINESS

セクシュアリティと多様性社会
21世紀の共生社会とは

■スピーカー
尾辻かな子さん
LGBT政策情報センター代表理事
前参議院議員

講演会後に尾辻さんを中心とする研究会を開催します。
詳細は当日ご案内します。(尾辻さんの希望者のみ)。

2016年6月8日(水)
16:30~17:30
深草学舎 和顔館 B106
龍谷大学 全学人権講演会
主催 人権問題研究委員会
共催 宗教部・学生部
お問い合わせ 龍谷大学教務部 075-645-7880

一般参加無料 (無料・申込不要)

カミングアウトするきっかけとなった講演会のポスター。これが無ければ“今”は無かった。

た。「最近、いろんな大学でセクシュアルマイノリティへの理解が深まっている」、「龍谷大学は対応が遅く、まだ取り組みがされていない」、「他の大学のようにセクマイサークルを作りたい、作ってくれないか」とのことでした。

僕は丁重に、「いやです」とお断りしました…。

理由は単純でした。NPO の集まりで出会った、セクマイサークルの大学生さんたち。サークルを作るにも維持するにも労力が必要で、「もうこんな活動辞めよう」と心を病んでしまった姿を間近で見ていたからです。初めは楽しくても、内部分裂や特定の団体との付き合いなど一般サークル以上の課題が付きまとうことも知っていました。

なにより、在籍する大学でセクマイサークルを立ち上げれば、自分がゲイであることがバレてしまうかもしれない。頭の中には、常に高校での出来事がありました。「せっかく頑張ってここまで来たのに、また全部崩れてしまう」、それだけは絶対に避けたいと感じました。

そんな面倒なことはしたくない。入りたいと思えば近くの大学に大きなサークルがあるし、自分にはネットで出会った友達もいる。サークルなんて必要ない、そう思いました。

【にじりゅう】

けれど、縁を感じたその講演会にだけは足を運んでみることにしました。講演後の“茶話会”には15人ほどが集まり、思い思いの感想を語り合いました。僕はというと、講演ゲストの隣の席に陣取り、「昔はこうでしたね」「今の言葉ではこうで」みたいに、めちゃくちゃ斜め上から参加

していました…(笑)。

最終的にはみんなが「この“つながり”を失くしたくない」ということで、その場に集まったメンバーでサークルを結成。やる気はあるのにやり方が分からないメンバーに、やり方を分かっているのにやる気が無い僕。「代表は嫌ですけど、アドバイザーとしてならいいですよ」なんて、今思えば「何様なんだ」って感じですが(笑)、結局やってみることになったちゃいました。

ちなみにこのとき代表に名乗りをあげてくれた子は、なんと僕の基礎演習と同じクラスメイト。後に精神的な殴り合いをしながら(笑)、一緒にサークルを作り上げていく大切な友人となる子です。これも自分が変わるきっかけとなる、大きな縁でした。

忘れもしない、2016年6月8日の水曜日のことでしたね。名前は後から決まったんですが…“龍谷大学 LGBTs 交流サークル -にじりゅう-” 結成の日です！

その後、プロジェクト支援のための奨学金を貰えるコンテストに応募することになりました。締め切りまで一週間しかなかったので、他のメンバーと徹夜で企画を練っていた記憶があります…(笑)。初めて大学生らしいことをしたというか、意見を出し合って自分たちの手で企画書を作り上げることは、今思えば僕が憧れていた“夢の大学生活”が叶った瞬間だったのかもしれない。

企画を組み立てる中で、サークルの方向性も決まっていきました。セクシュアルマイノリティの学生を中心として、サークルをみんなの居場所にしたい。月に1度は集まりたい。来やすいように、人目につかない場所を確保したい。サークルができたことを周知するためにも、イベン

トをしたい。

見事コンテストに通って奨学金を手に入れた僕たちは、半年後、タレントの牧村朝子さんをお呼びして講演会を開きました(サークル名の“LGBTs”という単語も、牧村さんの表現を参考に付けたものだったりします)。予想を大きく上回る来場者の中、メンバー一同バタバタでしたが…その分、達成感は余りあるものでした！

この講演会をきっかけに他大学のサークルと“つながり”を持ち始め、翌年には京都の6大学で合同交流会を実施するなど、活動の幅が広がっていきました。このとき出会った仲間たちとは未だに深い交流があります。性に関するプチ勉強会を開いたり、イベントに出展したり、家でお菓子を囲みながらゲームしたり…それは、僕が幼い頃からずっと望んでいた友達付き合いのあり方、そのものでした。

【自分を“受け容れる”】

結成から1年弱ぐらいで、自分たちの体験談を基に講演を行う、啓発活動にも取り組んでいきました。初めは表立った啓発活動に抵抗があった僕でしたが、大学の登録団体で無い以上、なにか認めてもらえるような活動実績を作りたいと思い、ひとまず龍谷大学の教職員を対象とした研修会の形で実施してみました。

すると、噂を聞きつけた他大学の先生からお誘いがあって、同様の研修を外部でも行うようになり、一つまた一つと積み重ねた結果…宗教部さんに支えられながら、小さな座談会形式から100人規模の研修会まで。気付けば2年間で20回以上の講演機会をいただきました。2週間で5回、それも午前には兵庫で、午後には大阪で講演なんて日もあって、とても貴重

な経験になりました。

日本を包むダイバーシティ推進の大きな流れに、上手く乗ることができたのだと思います。その上で、用語やデータなどの基礎知識を知らせる形の講演会や研修会は既に行われているだろうと、学生である自分たちの体験に絞って話すようにしたのが良かったみたいです。また、質問用紙を使った匿名での質疑応答の時間を長めに取ることで、より深いお話ができたと感じます。

僕が話す体験談は、やっぱり高校時代の話です。そして講演していた当時、ある大学院の学生さんが、僕とほぼまったく同じ理由から亡くなった話を知りました。友人に告白したこと。アウトティングされたこと。初めは強く振る舞っていたこと。けれどどうしようもない不安と焦りで、パニックになってしまったこと。僕が大学に入学した 2015 年の話でした。

勝手ながら、どこか想いが重なりながら講演するようになりました。報道で取り上げられなければ知る機会が無かったわけですから、僕のように“見えていない”だけで、実は同じことがたくさん起こっているんじゃないかと思いました。「なら僕はせめて話していこう、一つの体験談として」、そう考えました。

加えて、「自分の経験を語るのは自分しかいないんだ」、と感じました。前述したようなドロドロした思いについてはなかなか話す機会がありませんでしたが、それでも自分の体験を何度も語るうちに「それも含めて自分だよ」と思えるようになっていきました。そうすると、不思議と他人に対しても偏見が無くなっていくというか、自他を“ありのまま

ま受け容れられる”ようになるというか、「このままでいい」と思う自分も良いし、「変わりたい」と願う自分も良い。徐々に、自分自身への偏見を壊していった気がします。

もしも、あのとき宗教部さんでカミングアウトしてなかったら、サークルを立ち上げてなかったら…自分のことを自分で縛り付けたままでした。息苦しくなって、それこそ高校のときと同じような出来事を繰り返してしまっていたかもしれません。

そういえば、初めの研修会の講演資料を作ったとき、代表の子とお互い大声で泣きながら意見をぶつけ合ったんですよ(笑)。以後、講演の度に「あれは良かった」「もっとこうすれば良くなる」と言い合える関係になり、回を重ねるごとに話の質を高めていくことができました。お互いの育った環境や今までの経験はまったく違って、セクシュアリティ違って異なるけれど、“分からないことを受け容れて、分かり合える”、そんな“つながり”ができたのだと思います。

【あり得なかった卒業、その先の未来】

大学4年生になる頃にはもう当初の斜め上からの思いはどこへやら(笑)、誰よりも僕がサークル活動にどっぷりと浸っていて。数年前にNPOの集まりで感じていた思いを乗せながら、“誰もが過ごしやすいキャンパス”へ向けて活動していきました。もちろんトラブルも何度かありましたが、それも昔関わった大学生さんたちの姿を思い返すことで乗り切れました。当時頑張っていたみなさんの思いをつないだからこそ、どうすれば上手く活動が進むかを考えられたんだと思います。「にじりゅう」よ

り前に龍大で立ち上がったセクマイサークルさんの想いもしっかり、つながっています。

サークルを運営する一方で、元々入っていた部活を辞めたり、バイトを掛け持ちし過ぎたり、なんだかんだいろいろありました。単位は常にギリギリでしたが、それでも頼れる学友や先生方のおかげで、無事に4年で大学を卒業できました！正直、絶対途中で辞めると思っていました…(笑)。もしくは留年を繰り返してようやく卒業できるかどうかくらいに考えていたので、大きな自信になりました。大学でやりたかったことは大体やり尽くしましたね。まだ出来ていないものは、大学院生のうちに出来ればいいなと思います…就職活動も含めて…。

また、完全に克服できたとは言えませんが“学校に通う”ことにも慣れることができました。人混みを恐れて電車に乗れなかった頃や、イヤホンで耳を塞がないとキャンパス内を歩けなかったときからすると、少しは成長したのかなと思います。

家族関係は今、一番良好です(笑)。母とは一緒に考えていくことで関係が良くなりましたが、父は知らない間にセクシュアリティについての事柄を調べてくれていたようで、実家に帰る度に「番組を録画したから見なさい」「この用語はちゃんと学んでいるか」など僕よりも詳しく話しかけてきます…。サークルを立ち上げた当初は「もし、高校と同じことが起きたらお互い立ち直れない」、「あまり表に出ないほうがいいんじゃないか」と心配されていましたが、なにより僕自身が活発に動くようになった姿を見て応援してくれるようになりました(あんまり表に出たくない気持ちは、僕にもまだあるから大丈夫(?)ですよ！(笑))。

年が離れている兄とは会う機会がそれほど無いのですが、僕がサークル活動で大きく動こうとしているときに「せっかく大学生なんだから、後悔が無いようにチャレンジしたほうが良いよ」と背中を押してくれたことが、とても嬉しく心強かったことを覚えています。

僕の家族の場合はカミングアウトが成功したと言えるのかもしれませんが、それはいろんなタイミングがうまく重なり合っただけのことです。お互いが頑張っても上手くいかないことはあるし、ひょんなことから話せる関係になることもあります。今の社会だと、カミングアウトすることがどの家庭にとってもベストとは限りません。ただ、カミングアウトできる関係性であれば、きっとお互いを大切にできているんじゃないかと思います。僕も数年前にはこんな未来に辿り着くと思っていませんでしたので、幸か不幸かではなく「運が良かった」と思うようになりました。

そうそう、大学生最後の年に、念願のパートナーができたんです！僕は中学の不登校期から友達やパートナーという存在への憧れがとにかく強くて、理想のパートナーの条件をずーっと書き続けていたらいつの間にか170個になっていて、その内の151個が当てはまるトンでもない人なんですけど…ってこれだけ書くと僕の方がトンでもなくヤバい奴ですね(笑)。先が見えない闇の中で必死にもがいていた高校時代、某つぶやきSNSで片想いしていた人でした。これもなかなか縁のある方で……長くなるのでこの先は個人的に聞いてください…(笑)。

それこそ、この先どうなるかは分かりませんが(笑)、できるだけ今を大切に生きていきたいと思います！

【“続けること”から“つなげること”へ】

いやいやいや！！なんか「いろいろあったけど、今は幸せいっぱい！」みたいな終わり方になりかけましたけど、現状大学院生として研究はまったく進んでいないし、借りてた奨学金は700万くらい返さないといけないし、就職どうなるんだろう…また失敗するのかな………というかそもそも昼間働けるのか…？ なんてお先真っ暗状態は、大学に入る前とそれほど変わっていません(笑)。

それでも、個人で講演する機会をいただいたり、啓発イベントのスタッフになってみたり、今の自分にできることをなるべくやっているつもりです。ずっと悩んで、チャレンジしてみたいと考えていた新しい事柄にも挑み始めました。それは本当に、どう転がっていくのか全然検討が付きません。「どう生きていくんだろう？」、「どう生きればいいのか？」

この問いは、きっと紆余曲折ありながら、これから先も持ち続けるんだと思います。ですが同時に、「僕ならどう生きれるんだろう」とも考えるようになりました。

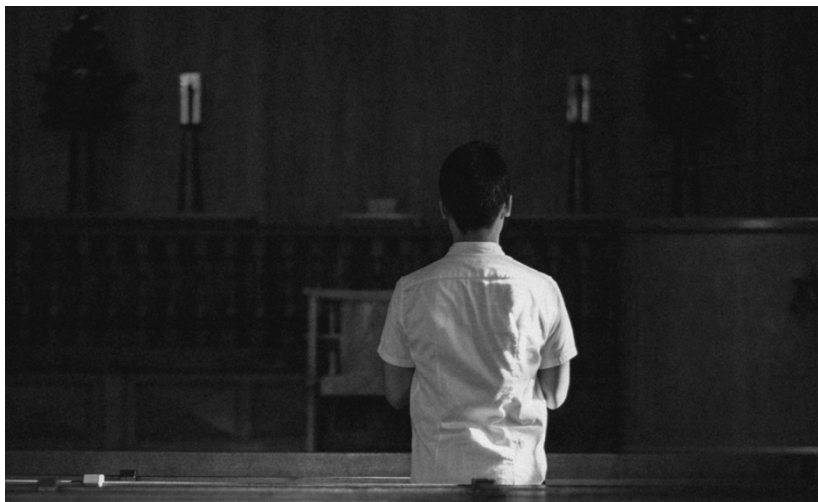
僕はある程度“続けること”が得意じゃなくて。そりゃもう、学校も部活も辞めてきたわけですし…(笑)。そして、何かを続けようと無理をし過ぎて、心身ともに崩れてしまった人たちが周りにいました。だから、“形にとらわれたまま続けること”が難しいと思ってしまいます。

代わりに、僕には“つなげること”が向いてるんじゃないかな、と思います。居づらさや不安を感じている人同士をつなげること。行動を起こしたいと思う人同士をつなげること。昔頑張っていた人の想いを今引

き継いで、この先につなげていくこと。たとえ僕がつくったものや僕自身がいなくなっても、その想いをまた誰かが“つないで” いてくれたなら、そのまた誰かにつながって、想いが少しずつ強くなっていく気がするのです。

…そんな綺麗なこと言えるわけじゃない、まだまだコンプレックスだらけの人間ですけど(笑)。「自然に生きながら」、これからもなにかを“つないで” いけたらいいなと思います。

この文章が、誰かの生きかたに、想いに“つながる” ことを念じて！



龍大の広報誌に載せていただいたときの写真。“ご縁”のきっかけ、顕真館にて
(龍谷 RYUKOKU 2017 N0.84)

シアトルで感じたダイバーシティ

鍛田 早紀

この度は、自分の経験を発信できる機会をいただきありがとうございます。私は大学4年生の時に1年間休学し、アメリカ・シアトルに留学をしました。シアトルは、街全体がダイバーシティであふれ、そこに暮らす人も多様で、それぞれがそれぞれの色を大切にしながら暮らしている、そんな風に見えました。最近では、日本でもダイバーシティという言葉が知られるようになってきましたが、留学から帰国して、シアトルと日本社会のダイバーシティの成熟度には大きなギャップがあり、逆カルチャーショックを受けてしまいました。

そこで、本稿では、LGBT などセクシュアリティやジェンダーに関する話題を中心に、アメリカ留学を通して感じたことをレポートしたいと思います。誰もが過ごしやすいダイバーシティ・コミュニティ、ダイバーシティ社会のためのヒントになれば、と思います。

ワシントン州シアトルはアメリカ西海岸の最北端に位置し、一年を通して過ごしやすい気候と自然に恵まれた美しい都市です。大手コーヒーチェーン店のスターバックスが生まれた地であり、Microsoft や Amazon 、 Expedia など、多くの IT 企業がシアトルに本社を構えていることから「IT 都市」とも呼ばれています。イチロー選手がいたシアトル・マリナーズの本拠地としても有名ですね。

留学中、アメリカ国内を旅しましたが、比較的、シアトルは、人や新し

いものに対して寛容な文化があると思います。そんな県民性(州民性?)から、人種や肌の色、国籍、性別や宗教など関係なく、人々が共生していて、日常的にダイバーシティを感じることができます。その中で、私が驚いたのはLGBTなどのセクシュアルマイノリティに対する寛容さ、当たり前さでした。

街のいたるところにLGBTコミュニティがあり、それぞれが目的や役割をもって存在感を示しています。特に、シアトルでも若者が集まるキャピトルヒルと呼ばれる地区は、レインボータウンでもあり、街中にゲイバーが数多く並び、レストランの店内外にも性の多様性を支持するレインボーフラッグが飾られていました。この街では、LGBTなどセクシュアルマイノリティの人だけでなく、ストレート(異性愛者)の人も気軽にゲイバーに入店することができるので、店内の光景はまさに、ダイバーシティそのものといった印象です。日本では、ゲイタウンと言われる地区のゲイバーなどは、当事者のためだけの場所であることがほとんどで、当事者以外の人が入店できない店が多いのではないのでしょうか。少しずつ認知度が上がってきているとはいえ、マイノリティとマジョリティの間には、まだまだ見えない線が引かれているのが現状だと思います。それに対し、シアトルで覗いてみたお店は、LGBTなどの当事者の人たちのコミュニティであると同時に、当事者以外の人たちとのコミュニティスペースにもなっています。店内で、みんなが一緒になって楽しく踊っているお客さんの様子から「レズビアンであろうが、ゲイであろうが、バイでも、トランスでも、ストレートでも、そしてそれ以外でも、まったく関係ない、みんなで楽しもうやあ！」みたいな雰囲気を感じました。

私たち日本人は、「普通」という言葉をよく使いますが、私が留学する

まで感じていた「普通」は、シアトルでは「普通ではない」ということに気づかされました。人種のるつぼ、サラダボウルと呼ばれているアメリカという国の成り立ちや、シアトルの歴史のなかで獲得されてきたのだと思いますが、実際に、同性カップルが街中で手を繋いで歩いている光景や、マイノリティであることをカミングアウトすることに寛容な空気や文化は、その街に住む一人ひとりが作っているのだと思いました。

そういう気風なので、設備などのハード面の整備や法律などの施策にも積極的です。例を挙げると、トランスジェンダーの人などが居づらさを感じる課題としてトイレがあります。女性用と男性用のどちらかしか選択肢がない場合、どちらにも行きづらいという問題がある中、私が通っていた学校には All Gender のトイレがありました。龍谷大学にも、多目的トイレを「だれでもトイレ」という名称に変更した All Gender トイレがありますが、アメリカの All Gender トイレは、性別に関係なく利用できる個室トイレが並んでいて、その前で女性も男性も関係なく順番を待っているというイメージです。初めて All Gender トイレを使用することになった時は戸惑い、「郷に入っては郷に従え」と気合を入れて使ったのですが、たくさんの学生が当たり前に使っているのを見て、今ではすっかり違和感はなくなりました。また、私の受けていたほとんどの授業では、初日に先生が名簿を確認するとともに、「She か He どちらで呼んだらいい？」と、生徒一人一人に質問します。これはほんの一例に過ぎませんが、学校というパブリックな場所でも、みんなが気持ちよく過ごせるような工夫や気配りがされていることに感心しました。

別の例として、アメリカ合衆国では全州で同性婚を合法としていて、州によってはセクシュアルマイノリティの人々の権利を保護する州法があ

ります。カリフォルニア州のロサンゼルス・ウェストハリウッドという街は、住民の過半数がLGBTなどのセクシュアルマイノリティである全米初の地方自治体として知られ、もし、アパートのオーナーが同性カップルであることを理由に入居を拒否した場合に罰金を払わなければいけないという法律もあります。こうした取り組みが盛んであるため、ウェストハリウッドは、西海岸屈指のレインボータウンとして、LGBTだけでなく誰にとっても魅力的な街となっているのです。

そんなアメリカでもLGBTなどに対するヘイトや暴力は残念ながらなくなりません。でも、そういう事件があれば、直ちに立ち上がって行動を起こすたくさんの市民がおられることに、とても勇気付けられた気がしました。

日本でも、東京オリンピック・パラリンピックに向けたアピールや、景気回復の起爆剤にしたい思惑などもあって、ここ数年急速にLGBTフレンドリーを標榜する企業などは増えていますが、まだまだ掛け声だけで、文化としては根付いていないのが現状でしょう。

LGBTなどのセクシュアリマイノリティの足元には、マジョリティ側からは見えないけれども、マイノリティ側からはハッキリと太くて深い線が引かれているのが見えているのです。その線を少しでも早く消し、みんなが平等に公平に暮らすことができるようになるためには、違いを認めあう寛容さと、相手をリスペクトする気持ちが欠かせません。体の性と自分が自覚する性が違って、好きになる性が違って、決して権利が侵されることはあってはならないと思っています。

私が英語の言葉で好きな言葉があります。それは「Who cares? (誰が気

にするの?)」です。シアトルで出会った人達は、よくこの言葉を私に投げかけてくれました。留学前の私は、行動を起こす時に、まず周りの視線を気にしていたことに気づきました。この言葉をかけてくれたおかげで、私は私の判断で行動しようと決め、自信を持って行動に移せるようになりました。留学前、私の考える「普通」や、日本の社会の「普通」が、シアトルでは「普通」ではなかったことに気づいたように、皆さんにも、そのことを知ってほしいと思います。このレポートが、多様な性に一人でも気づいていただくきっかけになれば幸いです。

執筆者紹介

中川 未悠 (なかがわ みゆ)

1995年、兵庫県神戸市に長男として生まれる。幼稚園の頃から絵を描くことや工作が好きで、高校は兵庫県立兵庫工業高等学校、デザイン科卒。その後、ファッションに強い関心を持ち、大学は神戸芸術工科大学、ファッションデザイン学科に入学。幼い頃から性別に違和感を感じており、2017年春に21歳で性別適合手術を受けた。その手術を受けるまでを記録したドキュメンタリー映画「女になる」の主人公を務めた。2017年から今も全国各地で上映会や講演会を行いながら、アパレル会社に勤めている。

東根 歩夢 (ひがしね あゆむ)

1992年、兵庫県生まれ。女性として生まれるが、幼い頃から自分自身を男性と認識。小学6年生の時、自律神経失調症を発症し、約6年間、悩まされる。18歳で家族に性同一性障害であることをカミングアウトし、ホルモン注射での治療や性別適合手術を経て、21歳で戸籍を男性に変更。現在は運送会社で働くかわら、LGBTに関する講演活動も行っている。

青山 (あおやま)

龍谷大学在学中。

龍谷大学LGBTs交流サークル「にじりゅう」立ち上げメンバー。

牧村朝子氏講演会の企画や、龍谷大学・佛光大学教職員向けセミナーに参加。

堀 由栗加 (ほり ゆりか)

龍谷大学社会学部在学中。

ジェンダーについて最も関心があり、様々なマイノリティについての学びに勤しんでいる。大学院に進学し更に学びを深めたいと考えている。コーヒーが大好きでカフェで読書する時間は至福の一時。

にし

龍谷大学国際学部国際文化学科卒業。

現在は会社員をするかわら、趣味で絵を描いています。

ぜん

龍谷大学文学部仏教学科卒業。

1995年奈良県生まれ。不登校や通信制の高校生活を経験した後、龍谷大学に入学してLGBTs交流サークル「にじりゅう」を結成。以後、教育機関等で講演や意見交換に努める。現在は佛光大学大学院で大学とLGBTサークルに関する研究を行いながら、SOGIE学習サークルカラ*スタを京都で運営する。(もしご意見や感想があれば zinen713@gmail.com まで！)

鋤田 早紀 (くわた さき)

龍谷大学社会学部地域福祉学科卒業予定。大学3年生を終え、アメリカ・シアトルへ留学・インターンシップのため1年間渡米。卒業後は、外資系オンライン旅行会社に就職予定。

大学生のための LGBTQ サバイバルブック Vol.3
みんなのキモチ

発行日 2019年10月1日
執筆者 中川 未悠
東根 歩夢
青山
堀 由栗加
にし
ぜん
鍼田 早紀
発行 龍谷大学
編集 龍谷大学宗教部
監修 龍谷大学人権問題研究委員会
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
電話 075-642-1111 (代)
FAX 075-645-7939
<https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/>



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY